

525  
214

6 7 8 9 50<sup>0</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6<sup>0</sup>/<sub>m</sub>

始



人 格 完 成  
自 覺 自 修

大正  
13. 8. 1  
内交

練 米 本 書 店 發 行

525-214

天祖ノ神勅

豐葦原千五百秋之瑞穗國是吾子  
孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉  
行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

御誓文

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ  
一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ  
一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス  
一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ  
一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ  
我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

明治元年戊辰三月十四日

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕汝臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名 御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣 侯爵 桂 太郎

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ  
輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ

六  
恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智徳ノ竝進  
ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭  
激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ  
保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入り  
テハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益  
世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民  
ノ協翼ニ頼リテ彌彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其  
レ之ヲ勉メヨ

大正十二年十一月十日

御名 御璽

攝政宮

## 序

生活は自己創造である。吾人が此の世に生れ出たからには、其の生活即ち自  
己創造を意義あらしめねばならぬ。價值あらしめねばならぬ。此の生活を價值  
あらしめるには如何にすべきかと云ふに、吾人には欲望と云ふものがあつて、  
其の欲望には限りがないから、満足する程度も定まらない。茲に於てか、吾人  
の自覺といふものが、大なる役目をなすものである。衣食住について云へば、  
美衣美食に誇るものがあれば、粗衣粗食を貴しとするものもある。大厦高樓に  
得意となるものがあれば、九尺二間の陋屋を優れりとするものもある。これ吾  
人の理想、吾人の自覺、吾人の生活標準に差違あるに依る。人生を價值あらし

めると云ふことには、誰しも反對するものは無いが、其の途が違ふのである。生活の意義を何處に求めるか。如何なる生活を價值ありとするか。或者は美しき衣服を纏ふのでなければ、價值ありと感せぬものがある。珍らしい物甘い物を食ふのでなければ、生き甲斐が無いと感ずるものがある。邸宅を宏大にし、庭園を美しくするにあらざれば、人生の意義を完うすることが出来ぬやうに感ずるものがある。されど此等は全然皮想の感に過ぎない。生を此の世に受けたからには、我即ち人格を鍛へあげる、即ち自己創造と云ふことに意義を見つければならぬ。自己創造、人格完成が吾人の理想である。茲に生活の價值を認めねばならぬ。

自己創造、人格の完成が吾人畢生の目的であり、其の日其の日の生活が、自己

創造、人格完成の一步であれば、これ意義ある生活であり、自覺である。自己創造、人格完成とは新しき語で、之を古い語で云ひ表はせば、修身である。修身即ち自己創造、人格完成である。自己を創造する即ち人格を完成するの徑路を指して修養と云ふ。而して自覺修養は自修である。小學校、中等學校に修身科と云ふものがある。中等以上の學校には修身科と云ふものが無い。されば中等學校を卒業すれば自己創造が終つた、人格が完成したと認められるのか。終生努力して尙自己の人格を完成し得ないのが常である。終生が自己創造である高等教育に於て人格完成、自己創造の途を講ずることは、今日の急務である。而して小學校、中等學校の修身科が其の目的を達する上に於て、缺ける所があるやうに唱道するものが多い。然かも其の罪を修身書に歸するものがある。今

4  
の修身書は徳目を羅列して、其の效能を説き立てるものが多く、生徒の實生活と懸け離れて居るやうである。又生徒の自己創造、自覺自修を促すやうに出来て居らぬやうである。此の弊を矯めんがために著はされたのが本書である。本書は吾人の全生活を、假りに幾多の生活に分け、各生活に於て修養すべき徳を掲げた、これが本書の特色である。學生生徒の實生活に適合して居る。教師たるもの、父母たるもの、青年少女たるもの、悉く之に依つて修養の途を明にし、人格を完成することが出来よう。尤も此の編纂は獨創ではない。スニース。ホツヂス。ツエーデイ三氏の合著たる「學校及び家庭に於ける宗教的修練」に依つたものである。

自己創造、自覺自修これ本書の特色である。吾人の心意の奥底からして自然に發露する所の理想、俯仰天地に愧ぢざる所の人格の價值を茲に認め（自覺）、之を吾人行爲の規範となし、常に反省して次第に向上、進歩、發展し、終生の努力を捧げ、大成を期せねばならぬ。（自修）否更に一步を進めて他の人格完成に努力し、自他共に大成の域に到達することを期せねばならぬ。

## 著 者 識



完人格自覺自修 目次

第一章 體的生活 ..... 一

清潔 身體・衣服・齒・皮膚 節制食物 慎重飲料水 睡眠  
呼吸 運動 剛勇 酒精 煙草 性慾 體的生活の價  
值 休養の價值

第二章 知的生活 ..... 二五

勤勉 精確 透徹 剛毅 耐忍 自己—依賴 真理の  
愛 知的生活の價值

1  
第三章 社會的生活 ..... 三

目次

目次

第四章 競技的生活

- 其一家族生活
  - 從順 眞實 正直 手傳 行儀作法 感恩 愛敬 忠實 宗教的感化 家族生活の價值 宗教的價值
- 其二 學校生活
  - 從順 正義 正直 眞實 禮儀 親切 寬大 宗教的感化 學校生活の價值
- 其三 共同團體生活
  - 正義 正直 眞實 親切 禮儀 寬大 公共心 團體生活の價值
- 其四 動物に對する關係
  - 觀察 洞見 耐忍 責任感 親切 勤勞

第五章 經濟的生活

- 公平 忠實 敏捷 競技的生活の價值
- 勤勉 名譽心 秩序 耐忍と剛毅 經濟と愼慮 正直 及勇氣 經濟的生活の價值

第六章 政治的生活

- 從順—教權 忠君愛國 團體觀念 皇統一系 君民一家 君國一體 國際關係 帝國主義 平和主義 國際聯盟 國際正義と人類共存 國家的の生活の價值

第七章 美的生活

- 詩歌 色彩細工 圖畫 模型製作 繪畫 自然美 家庭園及び學校園 行爲及び品性

目次

4 第八章 國民生活の内容……………一八〇

神道 儒教 佛教 武士道 泰西文化 國民道德の要旨  
第九章 行爲の動機……………三二

利己 利他 自重 他重  
第十章 道德的價值判斷……………三七

第十一章 道德的最高規範……………三〇

至誠 至公 至中  
第十二章 自覺自修……………三四

# 人格自覺自修

寺内 穎著

## 第一章 體的生活

吾人は最高の能率で、活動することの出来る様に、吾人の身體を發達させねばならぬ。即ち身體の健康を保つ許りでなく、又體力といふものをも増進せねばならぬ。これには其れ〜重要なる條件といふものがあるから、之に通じて居らねばならぬ。

2

一、清潔 疾病は細菌より來るといふ見解に依れば、身體を清潔に保つのは必要なることは、最も明白である。危険なる細菌は塵埃の内に存在して、絶えず健康を脅して居る。即ち爪の間とか、身體の表面、殊に手とか顔とか云ふ所に、積つて居る塵埃中に居を構へ、口とか切創とか擦傷とか云ふ所から、體内に運び込まれることが少なくない。かくて病氣となり、炎傷を起し、生命を奪はれることもある。されば度々入浴して、身體を清潔に保つのが必要がある。危険なる細菌は、不潔なる衣服にも居を構へ、體内に運び込まれる。衣服の清潔と否とは、予の關する所にあらずなど、太平樂を云ふのは大間違である。是非とも清潔にせねばならぬ。

危険なる細菌は、齒の間とか、うるなどに堆積される所の食物の中にも居を構へるから、之を放置すると、細菌は大喜びで、其所を己れの工場となし、繁殖所とする。齒の掃除を怠つたために、幾多の重き病氣に陥つた例は乏しくない。されば常に齒を清潔にして置くことの必要なるのみでなく、適當に齒科醫の指揮を仰ぐことも必要である。

皮膚の機能は老廢物を排泄し、且つ特に體温の消散を調節することである。此の機能を完からしめるには、之を健全なる状態にあらしめねばならぬ。第一に毛孔の塞がらぬ様にせねばならぬ。之が爲めには毛孔より發出する物を、體の表面から、時々除去せねばならぬ。これ入浴の必要なる所以である。又粗きタオルで全身を摩擦しても、其の目的が達せられる。發汗を來す運動は毛孔を清淨にする。尤も緩慢なる繼續的發汗、其れについて吾人が意識せざるものは、

3

汗腺の細管には老廢物が附著して殘留するが、急速なる發汗は此等の老廢物を洗ひ去る。

身體の機能をして有效ならしめ、且つ身體其者の健全を増進するには、身體の清潔といふことが根本である。吾人は身體の能率を維持し、且つ之を増進するの義務があるから、身體を清潔にすることは道德的任務の一つである。否、身體の清潔といふことは、衛生上より、美學上より、道德上より、又宗教上より見て必要なることである。禮儀の上より、自重の上より見ても、身體を清潔にして其の能率を維持せねばならぬ。身體を清潔にするの習慣は幼少の時より養成すべきである。

二、節制 飲食の慾、睡眠の慾、性慾、これ等は體慾である。此の體慾を規律正しくすることが必要である。節制とか克己とか、自制とか、恭儉といふ徳は、茲に發揮せらるべきである。

食慾は根本的のもので、之に依つて身體が保たれるのである。身體の能率如何は吾人が食する所の物、食する分量、食する方法に依つて異なるものである。吾人の身體的及び精神的能率は、主として食物の品質、分量及び消化如何に依ることは、近代科學の證明する所である。

食物の品質 について云へば、或食物に他の食物よりも、身體の健全を増進するに適して居る。されば、吾人の食する所の物は、衛生上等閑に附する能はざるのみでなく、又道德上からも等閑に附することは出來ない。

'Mann ist was Mann isst Man is what he eats'. (獨逸の諺)

**食物の分量** についても同様である。近代の科學的研究に依れば、吾人は一般に食量多きに失すと云ふことである。其の結果は老廢物が體内に堆積され、醗酵状態にある。かくて身體を毒して、之を害し且つ弱め、營養機關は過重に苦しみ、副産物を排除する機關も亦過重に苦しみ、従つて身體が苦しみ、心意も亦苦しむ。されば過度に食することは、衛生上有害たるのみならず、道德上にも害があり、吾人の全生活を害する。これ心意の活動は身體の健全如何に左右されるからである。

**食物の咀嚼** といふことも、衛生上、道德上等閑に附することは出来ぬ。消化は口腔内に始まるものである。之を疎略にすれば、胃の腑に過重の負擔を課することゝなる。其の結果、消化作用が十分に行はれず、體力が弱められる。

身體機關が弱くなれば、之に應じて智力も徳力も害される。

食慾についての節制及び克己の徳は我々兒童及び青年時代に涵養せねばならぬ。

**飲料** についての節制及び克己の徳亦然りである。水は體的生活に缺く可らざるものである。食物の場合と同様に、飲料の場合にも、吾人の身體的能率は、吾人が飲用する水の品質と、之を飲用する方法如何に左右される。品質については純粹といふことが非常に緊要である。吾人の食する食物、呼吸する空氣と同様に、飲用する水の中にも、往々病菌の存在するものである。例せば、水はチブス菌を傳搬することが多い。されば、かゝる危険の根源から、吾人の身體を保護することが必要である。衛生上の見地よりすれば、都會生活に最緊要な

物は水の供給である。都人士は汚瀆、殊に下水より來る害惡を除くことに努めねばならぬ。

三、慎重 飲料水に對し、慎重即ち注意周到といふことは、衛生上の責任ばかりでなく、道德上の責任である各個人は自己の體的生活ばかりでなく、社會一般の人々の體的生活をして、飲料水より來る危險から免れさせる道德的責任がある。

道德的責任は亦飲料水の飲み方に迄も及ぶ。飲み方如何は衛生上、道德上に關係して居る。食物を咀嚼して居る時に、水を飲んでではならぬ。若し其の際、水を飲むと、唾液が出て來ぬから、消化作用を妨げる。唾液は食物を潤ほし且つ柔にする役目を持つて居るが、咀嚼中、水を飲むと、食物を胃の腑に送る迄

の適當なる準備を妨げる。即ち消化を妨げる。消化を善くすることは、身體の健全に缺く可らざることである。吾人幼少の時は、時々又少し宛、此の衛生法に違背するものであるから、特に注意して、良習慣を造らねばならぬ。

以前は食事中(咀嚼中のことにあらず)、水を飲むことは一般に愚なりと考へられた。これ消化液を稀薄にして消化作用を緩漫ならしめるものであるとした。然るに實驗に依れば、胃中に水が多くある方が、消化作用を進捗し、次で起る吸収作用も迅速に起ることが分つた。

睡眠 は體慾なりと云ふても宜しい。身體の維持及び健全に必要缺く可らざるものである。實に吾人の身體的能率及び智力的能率は、主として睡眠に關係して居る。目醒めて居る時は、腦は絶えず活動して居り、些末の事柄にも働く

ものである。かくて絶えず其のエネルギーを消費して居るのである。茲に疲勞起り、休息を要する。睡眠は腦のエネルギーを蓄積し、且之を更新するに必要な休息を與ふるものである。これ獨り腦に對してばかりでなく、身體の他の諸機關に對しても同様である。睡眠中、多少活動しても、其の活動たるや、之を目醒めて居る時のに比較すれば、休息して居ると云ふても宜しい。其の結果、吾人の身體的エネルギーの貯蓄となり、更新となるのである。眠つて居る時は、消費と破壊とは止んで、蓄積と構成とが行はれる。

睡眠は吾人の發育と發達とに必要なものである。従つて睡眠の分量、深淺、規律正しきことは、身體の健全に大切なる條件である。之について慎重なると及び自制を發揮することは、衛生上大切で、又道德上の責任である。換言す

れば、道德的見地より、其等は徳である。身體的及び智力的健全と關連して、睡眠の至重至要なるに、之を輕視するが如きは、衛生上の害にして、又道德上の害である。睡眠と云ふ構成作用中に起る所の者は、獨り四肢の發育ばかりでなく、又腦の發育と發達とである。食ふと云ふことは唯取入れるだけであるが、眠ると云ふことは造ることである。されば現代のものに、之に關する智識を與へ、慎重、自制といふ徳を練らせて、子孫のために圖らしめねばならぬ。

身體の健全を保つ主要な條件が尙一つある。適當なる呼吸をなすことで、これ亦慎重の徳を喚起するものである。我々は生れて死ぬ迄呼吸する。我々の身體の健全は、呼吸する所の空氣の如何と、之を呼吸する仕方如何とに依つて左右される。換氣の宜しき室内に於ける新鮮にして純粹な空氣と、換氣の不良な



る室内に於けるの事を比較すれば、效果甚だ分明である。換氣宜しき教室では、吾人は自然に學習を楽しみ、眼は輝き誤謬を生ずることが無いが、新鮮なる空氣の入込む設備なき教室では、學習に氣乗りせず、眼は緩み、容易なる語ですら誤るものである。

吾人が呼吸する時、空氣中の酸素が肺臟で炭酸瓦斯となる。換氣惡しき室には、空氣中の酸素が次第に減少して、吾人に有害なる炭酸瓦斯が増加する。以前は其れを吸入する故、害されると説明したものであるが、其は誤つて居た。近來の實驗によれば、換氣不良なる室内に生活するの害は、化學的不純（酸素の缺乏及び炭酸瓦斯の吸入）よりも、寧ろ室内空氣の溫度、濕度及び停滯に依るといふことである。教室内の空氣を温めると、往々兒童の呼吸器を害するこ

とがある。吾人は換氣法に通曉することが必要である。學校のみならず、家庭に於ても然りである。之に對する慎重の徳は道德的責任として涵養されねばならぬ。

之につき更に考究すべき一方向がある。近代の科學は、空氣中に無數の細菌存在し、其の或物は人類の敵で、呼吸と共に之を體内に持來すと、身體の健全を脅かし、時には生命を奪ふことを示した。されば室内の換氣を良くし、室外にては塵埃を避くることに注意せねばならぬ。又室内を清潔にすることに注意し、床上の拭掃除、器具の拂拭、衣服を清めることにも注意せねばならぬ。呼吸の仕方も等閑に附すべきものではない。口より呼吸してはならぬ。不適當なる呼吸即ち口より呼吸するのは、大抵鼻疾のある證據であるから、どうし

ても口より呼吸するものがあれば、醫師に見せねばならぬ。鼻疾は往々吾人の智力の退却の原因をなすものである。呼吸は一種の技術と云ふても宜しいから、一定の呼吸練習をなすが宜しい。

**運動** も身體の健全に主要なるものである。運動に二の形式がある。遊戯と身體の勞働とが其れである。兩者共、適當にやれば身體の健全を來す。遊戯は特に我々兒童及び青年のものである。都市で空地をトし、監督の下に遊戯を行はせることが、都市事業の一つとなつて來た。そこで學校では校庭を解放して遊戯場に充つるやうになり、兩親は戶外遊戯が兒童の正しき生活の一部分であり、其れなくては、體的生活のみならず、道德的生活も脅されることを悟るやうになつた。

**體操** も亦一種の健全なる身體運動である。體操は遊戯と勞働との兩性質を持つて居る。身體の活力と能率とを高める學校では、體操器具を備へ之を有効に使用させて居るが、身體を健全にする許りでなく、秩序と鍛鍊とに依つて、道德的效果をも收める。筋肉が發達すると、知ること爲すこととの間隙が狭くなつて、動的心性 (motor mindness) が増して來る。吾人は普通の健康、單に疾病なしと云ふ状態と、盜る、許りの活力、健康、元氣より來る快活なる感情との差別を意識し、之よりして勇氣、希望、正しき名譽心、艱難に堪ふる力を生じ、困難なる事をなし、煩瑣なる事に堪へ、誘惑を拒絶するに至るものであるが、運動不十分にして筋肉鍛へられざる時は、柔弱の感起り、放縱となり、容易に失望落膽し、無能率の感を懷くに至るものである。

身體的運動のために、多量の時間を要すると云ふことは、憂ふる必要はない。各個人の身體的及び智力的強さに對して、將來に來る要求に應ずる準備である。精神活動の根源たる身體の練磨に、多大の時間を費すは當然である。

四、剛勇 體力即ち身體が剛強であると云ふことは、身體の維持に必要である。道德化せる身體的勇氣は、合理的自己防禦である。身體をして驚愕とか、不意の攻撃若くは持續せる攻撃とかに堪へさせるものは、體力即ち身體的勇氣である。

吾人は耐忍に且つ勇敢に苦痛に堪ふること、恐れずに、然かも注意深く危難に當ることを習はねばならぬ。かくて身體にのみならず、精神にも有效なる務をなすのである。勇士の行動茲に表はれ、國士の念茲に養はる。

清潔、自制、凡ての體慾の規整に於て、呼吸及び睡眠に於ての慎重、其の他、運動、體的勇氣及び節制は體的生活に關する徳である。

五、酒精 酒精の身體組織に及ぼす害毒は甚しい。血液中の白血球は食菌作用を營み、自然的に身體の保護者であるが、メチニコフ氏 (Metchnikoff) は酒精のために、白血球が傳染病菌の攻撃に對する抵抗力を減せられることを證明した。白血球の機能は此等の病菌を弱め且つ打破することである。白血球は焔衝の場合には、兵士の如く前進して、身體の敵と戦ひ、其れを食ひ盡すものである。されば白血球は吾人の朋友で、アルコールは敵である。これ白血球の戰鬥能力を弱め、血液中に生活する此等微細なる朋友の抵抗力を減するからである。科學は亦アルコールの腦に及ぼす害毒を説いて居る。アルコールは腦の高等

中樞に影響する。高等中樞は自制と関係がある。科學は更にアルコールの神経系統に及ぼす害毒並に寒熱に堪ふる力を弱めることを説いて居る。又吾人人類の重荷たる狂人の大多數は、直接なり間接なりにアルコールと関連して居る。

單に少量の飲酒家でも、其の子供は甚しい影響を受けるものである。ドレーク氏 (Drake) は教へて云ふ。

全然禁酒家の兒童は、平均して大さ、身長、體力、知力に於て優つて居る。少量の飲酒家の兒童に比すれば、平均一、二年進んで居る。目、耳及び其の他の體的缺點は半數よりも少ない。少量の飲酒家の兒童に及ぼす害毒の甚しいのが分かる。父の罪は第二代、第三代に現はれる。

さればアルコールと身體組織との關係の重大なることは明である。アルコール

は身體の活力、健康及び能率を弱める。アルコールは吾人の身體的生活の敵である。衛生上より見るも、道德上より見るも、禁酒は吾人の義務である。經濟上より見れば冗費である。罪惡の上より見れば、社會に於ける罪惡の過半はアルコールより來る。節制の徳最も必要である。

六、煙草 煙草の害については意見區々であるが、兒童に及ぼす害は明である。煙草の中にあるニコチンの害は、心臟の働を弱め、神経を刺戟し、身體の成長及び發達を停める。されば少年の禁煙は必要である。

七、性慾 性慾を規整することについての自制は、身體の健全に必要であり、且つ徳性との密接なる關係があるから、吾人の道德的訓練上、特別の考慮を要せられるのは當然である。兒童期より青年、青年より成人への過渡期は、人生

最緊要なる時で、此時期に起る體的及知的變化の性質と意義とは、科學者のみならず、教師、兩親及び我々兒童、青年にも會得されねばならぬ。兩親及教師より之についての知識を與へられざりしたために、身體、智力及び徳性を害したるものが甚だ多い。

かく緊要なる性的事項は如何に取扱はるべきかと云へば、其の取扱が吾人の徳性を進めるものでなければならぬ。又其の時期も吾人發達の各時期に適合せねばならぬ。近代の研究にて、其等の時期は多少確定された。吾人は其れに従ふて相當の教授を與へられねばならぬ。

### 體的生活の價值

體的生活は道德の體系上、如何なる位置を占めるか。之についての見解は至つて區々であるが、切然と相反する所の二見解がある。一は肉體は精神に從屬すべきものなりとするのであるが、此は單に從屬を以て足れりせず、抑壓さるべきものとするものもある。其の結果は制慾主義で、現世を否定する哲學や宗教より來るものである。

此の理想に反對する所の見解は、身體の威嚴と價值とを認むるもので、古代ギリシヤ人は之が代表である。乃ち身體の調和的發達は人格完成に缺く可らざるものとした。身體は靈の健康及び美の外的象徴であるとした。近代に至り、吾人はギリシヤ人の評價に復歸して、再び體的生活の本質を肯定した。

體的生活は本質的價值を有するが、其れよりも更に高尚なる價值の媒介と

して尊ばれることを知らねばならぬ。身體的生活の重要なることは、近年に至り新に認められる様になつた。智的及び徳的缺陷で、以前は精神の腐さつたためとせられたものが、身體的缺陷の結果であることが分つた。即ち身體的方面の改善のために、智的及び徳的缺陷が救はれる。両親及び教師から不徳と認められた兒童で、往々或缺陷若くは疾病から來ることが見出された。さればかゝる場合には注意して遺傳及び身體的狀態を檢討するの必要がある。

身體的價値は更に高尚なる價値の媒介として重要である。若し之を忘れて單に身體の發達のみを圖ると、均齊を缺く恐れがある。身體的生活を道德化するには、身體其者が優秀で且美なると共に、更に高尚なる價値を進むるに適當なる媒介たるやうに發達させねばならぬ。

### 休養の價値—遊戯

遊戯にはゲーム、スポーツ、娛樂、諧謔など種々あるが、何れも休養を目的とせるものである。遊戯は本質的善であり、生活を直接に豊富にするものである。遊戯は單によりよく働かんがために之を爲す許りでなく、遊戯の清き楽しみを得んがために之をなすものである。されど休養は吾人の勢力を恢復して更に働かせる所の媒介的價値を有することも明かである。殊に近代に於て勞働が分業的となり、業務も亦分業的となりて、生活を單調にするやうになつてからは、休養の媒介的價値は一層多大なるに至つた。

遊戯は活動其者が愉快であるが、仕事は活動其者よりも他の目的に向けられた活動である。されど仕事も發明及び商業、學習及び美術の如き創造活動とな

21  
ると、大部分活動其者が愉快であり、従つて遊戯に似て來る。茲に本質的善と媒介的善とが一致する。

凡て仕事は幾分遊戯の性質を帯びて居る。薪を割り、荷車を推すのも、吾人の身體にエネルギーが充ち満ちて居る間は愉快である。されど之を職業とする時は、單調に流れ、倦厭を來すやうになる。従つて凡ての仕事は理想的なるにせよ。愉快なるにせよ。早晚之を苦しいと感ずるやうになる。これ其活動が單に望まじき所の目的に向けられ。活動其者が遊戯の性質を全然失つたためである。されど此の苦しい境涯に堪へることは必要である。吾人の元氣が新鮮で、仕事に對する熱心のある間に仕遂げ終ることは少ないからである。吾人は仕事に對する心の態度を修養して、仕事を遊戯化することに努めねばならぬ。

## 第二章 智的生活

25  
吾人は知るといふ能力を有する合理的生物であるから、知識を習得するのは、吾人の義務である。知識は吾人のあらゆる目的に到達するの媒介物である。吾人の直接の要求、身體の要求の如きすらも、知識ある人は無智の人よりも有利の位置にある。如何に事物を處理すべきかを知る者は成功し、之を知らざる者は失敗する。知識は社會的認識、社會的位置を護るの媒介物である。吾人は單に麵麩を獲るのみを以て足れりとするものではない。吾人は社會的性質を帯びて居るから、此の方面に進展するものであり、社會に會得せられるやうにと思ふものである。知識は社會的尊敬を受くるの媒介物であり、無智は通例輕蔑的

となり、憐れむべき者とせられる。

知識は力である。(Knowledge is power.) 最高の自我實現をなすの方途を與ふる所の力である。

知識を習得するに最良の結果を得るには、或種の意志の習慣、或種の行爲が必要である。之より其れを述べよう。

一、勤勉 (Industry) 知識を獲得するには、知力を熱心に且つ系統的に働かせることが必要である。吾人が第一に學ぶべきことは、知力を個々別々に働かせないで、系統的に確定的に働かすことである。之を爲すには興味を喚起せねばならぬ。學習事項に興味起れば自ら勤勉となる。

二、精確 (Accuracy) 知的生活に緊要なる第二の徳は精確である。精確に知

覺し、精確に記憶し、精確に思考し、精確に推理し、精確に話すことは、知的發達を十分ならしめるに必要である。凡て知的作用を精確にするには、自己に對して誠實、他人に對しても誠實でなければならぬ。知的精確は道德上の眞實 (truthfulness) 及び正直 (honesty) と密接に關係して居る。従つて其の不精確は虚偽及び不正直 (falsehood and dishonesty) と密接に關係して居る。

知的發達の本來の目的は知識の獲得である。然るに不精確なる知を得ることとは目的と矛盾して居る。不精確なる知識は知識では無い。否、知識に反抗するものである。誤謬は不精確の結果である。誤謬は重大なる知的害惡であつて、往々道德上の害惡と密接に關係して居る。

不精確は不注意といふ害惡より來ることがある。或點より云へば一種の不注意



意である。かゝる不注意は容易に習慣となるものである。されば單に知的損失としてのみならず、道德上の責任として矯正されねばならぬ。

三、透徹 (Thoroughness) 透徹は精確と密接に關係して居るが、其れとは異なつて居る。一の事項を追究する時、十分精確であつても、之を處理するに透徹的ならざることもある。透徹は一の事項に熟達させるものであるから、知的生活の本來の徳である。吾人は課業に熟達せねばならぬ。知識は力なることを確信せば、透徹せる知識の更に大なる力なることを確信すべきである。

四、剛毅 (Perseverance) 知的生活には剛毅即ち不撓不屈の徳が必要である。吾人年少者は容易に失望落膽するものである。仕事は往々困難であり、多少不愉快である。従つて之を成就するには、毅然たる不撓不屈の努力を要する。困

難に打勝ち、障礙を打破し、凱歌を擧ぐるの愉快、勝利を得るの榮譽、成功の報酬を得ることに向つて、吾人の元氣を鼓舞せねばならぬ。不朽の名譽は剛毅即ち不撓不屈の門より來る。

五、耐忍 (Patience) 知的生活に於て高尚なる徳は耐忍即ち持久である。純粹なる知的事業を遂ぐるには、苦痛に堪ふるの能量が必要である。之を耐忍と云ふ。吾人は直接の結果を實現せんと欲望よりして、往々不耐忍となり、事業を成就するに必要な手段、時間及び努力について配慮することを好まぬ傾があり、短兵急に行はんとするものである。されど短兵急に標的に到達することは往々不可能である。依つて徐々たる進歩に堪へねばならぬ。困難なる事業、時としては全然不適意なる事業を處理することに堪へねばならぬ。

六、自己—依頼 (Self-reliance) 知的生活を發達させるのに、更に至緊なる徳は自己—依頼である。兒童期は縦屬の時期である。自ら處理し得ることをも他人に依頼せんとするもので、學校の課業ですら困難なるものに出逢ふと、教師に依頼し、學友に依頼し、若くは兩視の助けを藉らうとするものである。この傾向が甚だ著しく且つ擴大して居るから、其の矯正といふことが重大問題となるものである。自己—依頼といふ徳は、之を涵養するために、特殊の注意を拂はねばならぬ。各人の成功するのも失敗するのも、多くは此の徳如何に依つて定まる。自ら助くるものには、人生のあらゆる門戸が開かれて居る。凡ての人は賞讃し、凡ての榮譽は招かずして來り、凡ての人は之に希望を囑する。

七、真理の愛 (Love of truth) 真理を愛するといふ徳は凡ての人に缺く可ら

ざるものである。吾人年少者は偏見家であり、獨斷家である。偏見及び獨斷は知的生活に危険である。誤謬に陥るのは之が爲である。吾人の知的發達に於ける首目的は、真理についての知識である。偏見は吾人年少者に存するのみならず、凡ての人に存するもので、是れ知的過失たるのみならず、又道德的過失である。

八、聰明 (Wisdom) 知識は大體に於て其れ自身目的ではない。目的に達する手段である。吾人の究意目的は個人及び社會の最高發展である。これ聰明が知的生活の徳の一つとして擧げられる所以である。聰明は特に聖人及び哲學者に獎勵される徳である。聰明とは知識の正しき使用といふもので、最高善の實現をなすに用ひらるゝ如きは其れである。聰明は天賦のものでなく、習得のもの

である。發達するものである。反省及び鍛錬の結果である。知識は價值ある目的のために使用せらるべき力である。自己及び社會の物質的、社會的、道德的及び靈的健全に關する所の善目的のために使用せらるべき力である。

### 知的生活の價值

知的生活の價值とは應用廣汎なる所の知識の價值をさすのである。知識に本質的の價值と媒介的の價值とがある。知識を獲得すること、所有することが、直接に正しき且つ尊き満足を生ずる時は、本質的の價值である。されど知識は更に進んで他の價值を生ずる鍵となる。理化學の知識が物質界を征服せるが如き、其の顯著なるものである。

茲に一つの大問題がある。知識は正しき行爲を爲すに必要であるか、若くは有用なるにせよ、必ずしも無くとも宜しいものなるか、云ふことである。ソクラテス子は徳は知識なり (virtue is knowledge) と云つた。ギリシヤ時代に知識とは聰明即ち人格的洞見 (wisdom or personal insight) を意味したが、今日の知識と云ふことは更に廣き意味を持つて居る。故に問題の意味を少しく變更して、過れる行爲は常に知力的作用上の過りを含んで居るかと云ふ方が宜しい。吾人の惡行爲の大多數は無智より來ることは、誰しも拒まぬ所である。更に又、凡ての惡行爲は、考へ方の狭いことや、亂れて居ることを意味することも、世人の認める所である。例へば怒は敵なりと知りながら、尙怒るは何故か。怒る時には其人は其場合を除外例なりと考へるのである。他人から侮蔑された時、

血あるものゝ怒るのは當然なりとして、克己の徳を敗ることに躊躇しない。されど冷靜の態度に歸りたる時、徐ろに自己の行動を反省する時、彼れの知力的作用の如何に異なるかに驚くであらう。怒は此場合にも他の場合と同様に愚であり惡であると考へる。此の時には侮蔑に堪へることが出来る。これ其の考へ方が亂れずに且つ明瞭なるがためである。惡しき方面に進む時は、考へ方が惡しき方面に向つて居る。知力の働きが明敏で、しかも往々惡を爲す者がある。これ僅に知識の或部門を修めたに過ぎないからである。生活を生活全體に通じて會得することが最高知識である。之を修めないものは、其他の知識が如何に多く修められても、正しき行爲を爲すことは出来ない。これ馬鹿學者(a learned fool)ある所以である。

知識が各人の行動に對する關係上、更に大なる役目をなすのは、思想に新たな内容を與へ、目のつけ所が異なつて來て、價值のない觀念は意識界から驅逐され、行爲を決定するの力を失ふやうに至ることである。空虚なる心意は、空き家の如く、惡魔が住むやうになる。されど新しい興味が心意を占有して居れば、之を亂さうとする力を打破することが出来る。

知識の増加及び擴張は生活の完成に必要であるから、之を以て道德的責務の一つとせねばならぬ。無智は處世上常に危険である。

## 第三章 社會的生活

### 其一 家族生活

吾人は社會的生物であるから、同胞と種々の關係を持つて居る。社會に生れ出た以上、終生、社會的關係を離れることは出来ない。凡て此等の關係は道德的理想に支配され、且つ道德的理法に支配される。されば社會的義務は社會的關係其者の如くに、多様にして複雑である。道德的活動の最大場裏は社會的關係である。

家族、學校及び社會は、習慣と法律との下に組織された社會的制度である。

此等の制度に因つて吾人は最大生活、即ち最善の自我を實現し、其の内の或物と絶えず相互作用を營むもので、其の相互的作用が道德的理法に支配される。

即ち義務といふものは家族、學校及び社會生活と關聯して居る。

吾人は家族の一員として生れる。最初の相互作用は父と母、姉妹と兄弟との間に行はれる。従順、眞實、正直、親切、禮讓、親愛等の如き道德的責務は此等の關係より發生するもので、之を遵奉することは、家族の最善なる發達並に個人の最善なる發達に、眞に必要なものである。此等の責務を實現するにあらざれば、家族は存立しない。

家族は大なる道德的制度である。社會を理想化する即ち道德化するの價値は無限である。各個人は茲に最初の道德的教訓を習得し、以て學校、社會及び國

家といふ更に大なる社會的、道德的生活に入るの準備とする。例せば茲に始めて人間の行動を支配する理法の存立とすることを意識するやうになり、且つ其の理法に適合するやうに警告せられ、警告せられる。兩親の命令は兒童の意志に取つて理法である。茲に従順の教訓を習得し、家族より社會國家に入る時に、社會及國家の命令に服従するの準備を得、社會の命令は慣例 (conventions) 及び風習 (customs) といふ形式、國家の命令は律令 (statutes) 若くは法律 (laws) の形式で來る。兩親の命令に従順なることが、漸次道德的性質を帯びるやうになれば、社會的風習、政治的法律に従順なることも、單に強迫若くは必要より來るにあらずして、道德上の責務と認めるやうになる。従順の責務について述べたことは其他の社會的責務についても同様である。家族に於ける道德的關係は、

社會に於ける道德的關係の準備となる。

一、從順 (obedience) 吾人が家族關係より發生する根本的徳の一つは從順である。兩親は兒童の自然的保護者であると共に、法律上の保護者である。されば兒童の幸福に責任がある。此の目的よりして兩親の意志は兒童に取つて法律となり、兒童は之を従ふ義務がある。兒童は一定の年齢、一定の成熟状態に達する迄は、規則として兩親の命令に従ふのが義務である。十四歳以前は其の年齢、其の状態には達しない。從順は家庭の存立に絶對必要である。其れがなければ家庭は成立たない。家庭を造るには、多少統一と調和とが必要である。即ち法律が行はれねばならぬ。茲に法律と云ふのは兩親の意志である。兩親の意志に不從順なることは無法律を意味する。不從順は家庭の混亂を來し、家庭が實

現せねばならぬ道德的目的を打破する。子としての従順は吾人の道德的發展に缺く可らざる要素である。従順は最主要なる徳で、自制 (self-control) を發達させるものである。兩親の命令が、價值あれば、ある程、法律及び法律授與者に對する尊敬を以てする従順といふものが表はれる。家族的従順の修練は、吾人が學校、社會及び國家との相互作用に於ての更に大なる更に生きたる従順をなすの準備となる。善良なる市民を造るのも、社會の秩序を守り之を愛するものも、従順の徳である。かくて年齢進み、自ら自己に對し法律授與者たることを意識する迄に覺醒する準備となる。即ち道德的人格として、行爲の理想を自ら造り、之を自己の意志に取つての法律として自己に課するやうになるの準備となる。

従順は養成し難き徳ではない。種族發達の歴史より見る時は、人類が組織的生活を營なんだのは、命令若くは法律に従ふた時である。兒童は此の種族的性質を背景として持つて居るから、従ひ易いのである。兒童は放縱、不従順を好むが如くに罵倒するものがあるが、其は誤りで、却つて正しき、秩序ある行動を喜ぶものである。従順は自然的趣味である。

二、眞實 (Truthfulness) 家族的生活の根本の徳に、又眞實といふものがある。虚偽の下には如何なる家族も存立しない。眞實といふことは、人間社會の如何なる種類の關係にても、之を價值あらしむるに必要である。談話の眞實、行動の眞實、内心の眞實、此等は兒童の時より發達せしめねばならぬ。されど容易なる業にあらず。兒童の性質上、虚偽を認められないことも多い。されど眞實を話すことは、家族の平和及び幸福に缺く可らざるものであるから、十分注意

して巧に且つ嚴重に處理せられねばならぬ。

三、正直 (Honesty) 正直は家族の道德的生活に關係する所の第三の徳である。こゝは眞實と密接に關係して居て、彼に云ふ所は此に適用することが出来る。此の徳の緊要なることは、社會について述べる時に詳しく説かう。

四、手傳 (Helpfulness) 家族に於ての手傳は、兒童の時より涵養されねばならぬ徳である。幼稚なる時は彼のために多くのことを他人が爲してくれらるものである。年齢稍長するに至り、其に分け前を持たせられるやうになると、多少懶い感じを懐くものである。加之兒童期には遊戯が本能的で、楽しいから、仕事に氣が進まぬものである。されど兒童は家庭にて手傳をなすことを教へられねばならぬ。家庭の仕事に彼れの貢獻をなすことを教へられねばならぬ。殊に

母のために用立つことが多い、用を足す即ち奉仕 (Service) といふ精神は涵養されねばならぬ。此の精神は倫理的にして宗教的である。

五、行儀作法 (Courtesy) こゝは學校及び社會生活と關聯して、更に詳しく學ぶべき徳であるが、これ亦特に家庭に屬する徳である。これは審美的命令ばかりでなく、道德的及び宗教的的命令である。其の最高形式は道德的及び宗教的精神の表現であり、好意の顯現である。家庭に於ける行儀作法の正しきことは、道德上に大なる効果がある。食卓に於ける行儀作法は、家庭にて教へられねばならぬ。

六、感恩 (Gratitude) 家庭と關聯して發達せしめねばならぬ偉大なる徳は感恩である。此の徳は特に兩親との關係に於て練習される。兒童は兩親の親切と



配慮とに負ふ所が甚大である。年齢幼稚なる時は、兩親の親切と配慮とを當然のことと思ふが、年齢の加はると共に犠牲と愛情とが其の中に常に含まれて居ることを會得するやうになり、感恩の情が覺醒するものである。子としての感恩を修養することは甚だ必要である。子として兩親の愛情及び犠牲の大なることを會得せざるが如きは大きな缺陷である。不感恩は人を賤しくする。

七、愛敬(兩親を愛すること) 兩親を愛することは兒童に自然である。それに意志の加はる時に道德的となる。家庭に於けるあらゆる徳に、兒童を發達させるには、兩親は親子の愛情でやるのである。眞の愛情は社會的生活の凡ての形式に通じて、最尊嚴なる徳で、特に親子の間に於けるものは然りである。兒童と兩親との關係は特殊のもので、兒童は兩親を愛すべき責務があり、兄弟姉

妹との關係に於ても同様である。孝は徳の本である。好んで從順となるのも孝の致す所である。眞實たるも、同情も、手傳も之より來る。愛情は家族に於て特に必要である。愛情が家族内に溢るゝ時、統一があり、調和があり、道德的進歩がある。相互の利害を認め、共同目的に向つて働くのも、愛情のためである。家庭内の美德は家庭といふ直接境涯を超越するやうになる。

八、忠實(Loyalty) 家族に關する尙一つの徳がある。忠實である。「ロイス教授(Professor Royce)」は忠實を以て道德の全生活を包含して居るやうに説いて居る。實に忠實は首徳(a cardinal virtue)である。家族の最善なる生活及び其の最高理想に對する忠實は、重要な道德的責務である。吾人を最能く愛する人々に對して眞實なること、其等の人々の利害に配慮すること、其等の人々

の名譽を衛ふことは、健全なる道德的生活を營むことである。家庭に對する忠實の徳を有する男兒及び女兒は、世界の害惡に對して大なる保護を有する。又往々誘惑に對する抑壓として用立つものである。一事を爲す前に、家族に不信用或は不名譽を持來しはせぬかと考慮せしめるのも此の徳である。家族の名譽といふことを鋭敏に感ずるのは、善き事であるから、是非此徳を建設せねばならぬ。

家庭に於ける徳、即ち從順、眞實、正直、禮儀、手傳、感恩、愛敬、忠實は家庭をして地球上最幸福なる場所、平和及び歡喜の場所、最心地好き且つ最純粹なる同胞の場所たらしめる。加之吾人は世界を觀察するに、其の始めは家族の眼を以てするものである。即ち己が家族の風を以て此世を律せんとするもので

ある。

家族は自然的愛情にて結ばれ居るが故に、道德を涵養するに最適する所である。

九、宗教的感化 家庭に於て兒童に宗教的養成を爲すの機會を供し、之が修練をなすは、兩親の責任である。家庭を宗教的氣分となし、兒童をして之が感化を受けしめねばならぬ。然るに多くの家庭に於て、兩親の宗教に冷淡なるは慨嘆に堪へない。兒童期生活上、兒童に對し、神様といふことが重要な位置を占めて居ると認められないやうである。

兩親は兒童の早期に於て、崇拜の對象である。赤子の時は兩親は實際神様である。母親の深甚なる愛撫、父親の強力なる保護、衣食住に對する兩親の日々

What is a That

の配慮、仕事や遊戯に於て兒童と共にする所の友情、此等は後來の宗教心を發達させる萌芽である。圓滿完全といふ理想的のものは、兒童生活に於て、家庭と關聯さすべきである。そうすると、成長してから、神様といふ觀念に觸れ、全人類に對する關係を會得することが出来る。父と母との人となり如何は、善良なる神の存在を感せしめ又は感せざらしめる生きた手本である。スタンレイ (Stanley) を改宗させたのはリヴィングストン (Livingstone) の説教ではなくて、リヴィングストンであつたと云ふことである。兩親が其の信條を例證するに足るだけの潑刺、剛健な修練を爲して居れば、兒童の宗教的涵養事業の大部分は、既に成就せられたと云うてよい。

兩親の一定せる具體的模範は偉大なる勢力を有する。兩親が祈禱すれば兒童も亦祈禱する、單に祈禱せよとか、祈禱の文句を教へるだけでは、詩歌の誦讀をさせるのと異なる所は無い。

食前或は食後の祈禱、就寢時の祈禱、家族的崇拜、死に對する態度、吾人の責任負擔を果すの道、不適意なる、社會的不必要なる人民の取扱方、罪を赦すこと、慾情及び快樂を犠牲にすること、過失に打勝つこと、……要するに眞の宗教、純粹にして汚されない宗教に於て、外部的に表現される所の凡ての行動及び習慣……此等の事柄を兒童は意識的に若くは無意識的に解釋し且つ模倣するものである。此等の習慣が兒童期に確立し、しかも其れが機械的でなく、生力 (Vitality) を有するならば、青年期に於て疑惑及び誘惑が精靈の城砦を攻撃する時、之に對抗することが出来る。

宗教についての直接教授をなすことも必要である。但し之をなすには兒童の日常生活と關聯するやうにせねばならぬ。即ち家族生活より現はれ來るもので、兒童の感情、知識の實際的要求を充たすやうな單純のものでなければならぬ。神學上の理屈ならば避けるが善い。寛大な行ひ、自己を犠牲にして務めることの喜び、惡事を爲す者には、自然的に、必然的に罰の來ることを知らせるなどは、最能く兒童宗教の發育を助けるものである。

兩親の性格、兩親の模範、兩親の教授の重要なることは云ふまでもないが、現代特に唱道すべきことは、家庭にて一定の宗教的風習を維持するの必要なことである。社會的形式、身體的態度、具體化する氣風 (mood) の薰染は宗教發達に偉大なる勢力を有する。祭禮の如き、又家庭の日々の宗教的儀式の如き

其の例である。尤も靈的熱誠、透徹せる準備、自己一修練を缺く時は之をして嫌厭の情を起さしめ、甚しきは死物たらしめる恐れがある。されどあらゆる形式を略する時は、宗教的痲痺及び衰滅を來すの更に大なる憂がある。

兒童が了解することも出來、行ふことも出來る最簡單なる形式は、食前若くは食後の祈禱である。これ程神に謝すること、神をあらゆる善事を與ふる所の賢明慈愛なるものとして認識することの、自然なるものが他にあらうか。今外國に於ける一二の例を擧げて、參考に供する。

朝の食時の祈禱の詞

Father, we thank thee for the night.

And for the pleasant morning light;

For rest and food and loving care,  
And all that makes the day so fair.

Help us to do the things we should,  
To be to others kind and good;  
In all we do, in work or play,  
To grow more loving every day.

晝及夕食時の祈禱の詞

Thou art great, Thou art good,  
And we thank Thee for our food.

By thy goodness all are fed;

Give us, Lord, our daily bread!

祈禱中、食卓の周圍の人々の手を握り合ふことは、兒童の幼稚期に家族の統一及び愛情の象徴 (symbol) として有效である。

他の風習 (Custom) で、兒童が早年より行ひ得るものは、就寝前の祈禱である。兩親は兒童のために祈り、兒童と共に祈り、兒童をして漸次自分だけにて祈るやうに導くべきである。祈禱の詞の最簡單なるものは「安らかに眠らせ給へ」(Now I lay me down to sleep,) で善し。

朝の祈禱を家族にて行ふことも、吾人の生活に歡喜と勢力とを與へる源泉である。これが爲めには夙起の必要もある。又祈禱の詞が家族の理想を表はし、

必要に應じ、兒童にも諒解の出来るものでなければ、無趣味となり、時には偽善に陥るものである。

朝に起き出づるや、身體に衣服を纏ひ、顔面を清めると同様に、靈にも理想を輝かし、奮勵の氣を引立たせることは誠に必要である。

更に他の善良なる風習は日曜日午後の散歩である。郊原に、森林に、山岳に、牧場に散歩して、大自然に對する驚異、賞讃の感を働かせることは、之を一轉して「大自然の神」(Nature's God) の認識と崇拜とに向はせることが出来る。

家族生活中に音楽を入れると云ふことも善いことである。樂器と共に唱歌をやり、神徳を讃へ、神事を想起させると、宗教心が自ら養はれる。各家には神徳を讃へたる歌集、神事の歴史を備へて置かねばならぬ。かゝる歌詞や作者に

關する解釋傳記なども備へるがよい。殊に神話、天照皇大神の御事蹟については詳しく知らしめねばならぬ。両親が其の子供に與へる最良の賜物は温情にて大讃美歌に絶えず親ませ、十分に會得させることである。凡て善良なる事物は時間と努力とを要するものであるから、これも同様である。但し費す所得る所よりも大なるものであることを忘れてはならぬ。

以上述べた所の宗教的風習 (Religious Customs) を徹底させる爲め、或補助を用ひることが有效である。繪畫を利用するのも其の一つである。家庭に於ける繪畫は、裝飾たるばかりでなく、勢力であり、強健劑であり、魔術である。されば十分に注意して、選擇し、各畫の十分なる美を發揮して、助力を完うするやうに心懸くべきである。

神徳に關する直接の繪畫の有効なるは云ふまでもなく、山岳、海洋の繪畫も亦大自然の美と偉觀 (wonder) とに包まれたる森嚴を兒童の心に喚起するものである。新奇なるものは心を新鮮にし、變化あるものは、心を引寄せ、力があるから、繪畫も絶えず變更せねばならぬ。

其の他の補助は兒童の讀み物を巧に支配することである。古き哲學者が云つた、「汝の食する所を告げよ、汝の如何なる人物なるかを告げん」(Tell me what you eat, and I'll tell you what you are) と、兒童が如何なる書物を食ふかを見出せば、彼が如何なるものであるか、如何なる者になるであらうかを明言することが出来る。

如何なる書物を讀ますべきかは、兩親が少しく注意すれば、之を明にするこ

とが出来来る。多くの圖書館では、男兒や女兒の爲めに最良の書物を、程度を分け、分類して表示してある。神徳に關せる書物も多い。之を宣傳せる人々の傳記もある。又冒險談で、道德的、宗教的徳の例證さるべきものも澤山にある。

### 家族生活の價値

我邦固有の制度に於ての家と云ふ觀念は他に類例の無い特色を持つて居る。即ち、

家とは家長權を以て之を支配するの親族團體である。

家長とは民法で謂ふ所の戸主である。家督相續者である。家督相續の特權と云ふものが民法に規定してある。

系譜、祭具及ヒ墳墓ノ所有權ハ家督相續ノ特權ニ屬ス(民法第九八七條)之に依つて見ると、家督相續は祭祀の繼續と云ふことが根本となつて居る。されば祖先の祭を受繼ぐと云ふことが家を受繼ぐと云ふことであると云ふても差支ない。而して之が孝の大本である。家長即ち戸主の地位と云ふものを、祖先の位であるとするのが出来る、即ち現在の戸主が、祖先に代つて其の位に居り、家族を支配して、之を治めて行くのである。即ち祖先の靈を代表して、家族に向つて保護の権力を行ふことである。祖先の家を代表して、祖先の家を將來に傳へて行くのが、我邦固有の家制度である。従つて家長即ち戸主たるものが、家族に對する責任は重大である。家長が躬行實踐以て各自の人格完成に努力せねばならぬ。此點に於て家族生活は本質的の價值がある、されど單に

家族生活其者にのみ、價值がある許りでなく、更に大なる社會的生活の準備としての價值も亦認められなければならぬ。

### 宗教的價值

人間は宗教的生物であると云ふことは人間が、經濟的生物、社會的生物若くは知力的生物たると同様に眞實である。世界の秘密は吾人の知識を超越して居り、吾人は宇宙の大勢力に支配され、僅に部分的に之を統御するのみである。従つて吾人が殆ど干預することの出来ぬ宇宙の性質に、深遠なる興味を感じることは、不思議ではない。かゝる興味が宗教の本質である。

宗教は全然價值の問題である。其の起源も發育も價值經驗を離れては會得す



ることが出来ぬ。原始人民の内には、宗教は重に身體的生活の主要なる必要に關聯して居る。

宗教の本質的價值は、精神状態の直接價值の中に見出される。此等の價值は、世界的秩序に従屬するの感情、世界的秩序の目的と調和し且つ協同するの感、善の勝利に於ける信仰及び希望、神聖なる理法 (divinelaw) に於ける樂しみ等より成つて居る。

物質界は變轉極りなきもので、人間の内的生活の最高價值に無關係である。否敵對するものであるとの明瞭なる心證の存する所には、宗教は必ず優勝の地步を占めるものである。此の場合に宗教的價值は人間をして自然界を超越させることにある。

宗教は亦實際生活を離れぬと云ふ所から、媒介的價值を有する。即ち道德的理想は、實際生活には不完全なる表現たるに過ぎないが、其の道德的理想を支持して、之を充實させようとするのが、宗教の任務である。正義人道の行はれぬ時、吾人は其の慰安を宗教に求め、其の希望を宗教に求める。現在に於て縱令一時は惡が勝つにせよ、永久的秩序に於て、善が勝利者なりとの信仰を保持するものが宗教家である。

### 其二 學校生活

吾人の遭遇する社會的制度の中に學校がある。吾人は家族から此の新しい共同團體へ入込み、茲で家族に於けると同様に、自己自身と同じい所の人間と交

相互作用を管み、家族關係と同様な關係を有するものである。従つて學校に於ける道德的責務の多くは、主として家族に於けるものと同様である。家族と學校との主要なる差異は、道德的責務の上より云へば、大體重きを置く所の點が相違するだけである。或義務は一方よりも他方に於て重要視される。或義務は吾人が兩親に對し兄弟姉妹に對する自然的關係より養成される。これは特に家族に屬する。又或義務は吾人が學校に對する關係より養成される。されど大體に於て、同一の基礎的道德的責務が、社會的兩制度から得られる。或意味に於て、教師は兩親の代りをなし、學友は兄弟姉妹の代りをする。學校は知的作用に關係する所であるから、知的德 (intellectual virtues) が特別の注意を拂はねばならぬことは云ふまでもない。されど學校も亦社會的制度であるから、絶えず社

會的方法で、交互作用する人々より成立つて居る。従つて學校の社會的生活に關する徳といふものが考慮せられねばならぬ。吾人生徒たるものは教師に對して特別關係を有し、又學友と通常の社會的關係を有するから、これ等の關係を道德化せねばならぬ。換言すれば、吾人生徒たるものは知的生活に屬する徳を涵養し、其の弊害に對して擁護せられるばかりでなく、又學校に於ける社會生活に屬する徳を涵養し、其の弊害に對して擁護されねばならぬ。

一、從順 (Obedience) 從順は家族に於けると同様、學校でも考慮せらるべき根本的徳の一つで、學校の生活に絶対に首要なるものである。之を存立させるために、一定の規則及び命令が必要である。此等の規則及び命令は教師の意志の表現である。或ものは國家の意志の表現であると云つて宜しい。これ等は吾

人生徒全體の利益のために作られたものである。吾人生徒たるものは之に従はねばならぬ。若し之が強制されぬならば、社會的混亂を來すものである。優良なる教師の一條件は生徒をして規則、命令を能く守らせることである。されど強迫して守らせるよりも、好んで守らせるやうにするのは更に優つて居る。單に專斷的教權に依るよりも、寧ろ規則、命令の價值を合理的に會得させ、かゝる動機よりして之を守らせる方が優つて居る。茲に至つて生徒の從順が眞に道德的性質を有するやうになり、學校の道德的氣風 (moral atmosphere) が一層健全なるものとなる。これは實に重要な事柄である。教師に對する生徒の態度は、人民が法律及び之を強制するものに對する態度と同様である。法律は正しき心を有する市民の朋友である。法律は大體に共同の幸福のために作られて居る。

市民をして此の事實を會得させること愈大なれば、市民の好んで之を守ること愈大である。かくて最優良の市民を造ることになる。學校に於ても其の通りである。學校の規則、命令は、生徒の便益のために作られたものである。教師は生徒の利益のために之を勵行するのであることを十分に會得させるやうにすれば、生徒は好んで之を守ること愈大なるものである。かくて最優良の學校市民の資格 (school citizenship) を造りあげるのである。茲に至り、教師の事業は容易となり、生徒の從順が眞に道德的となる。

二、正義 (Justice) 學校生活に關聯する徳の重要なるもの、第二位は正義である。正義の念は人類には本能的である。此の本能に違背する時、憤恨若くは復讐の念が起る。人と人との交互作用に於て、正義は公平なる行動 (fair play)

を喚起する。されば正義は政府の下に組織された社會の根柢である。學校は統治體 (a governing body) であるから、其の規則及び命令は各員の權利を正當に尊敬せねばならぬ。生徒各自は學校の規則、命令の前には平等であらねばならぬ。

學校の規則、命令の適用若くは強制に於ても、寸毫の偏頗があつてはならぬ。善良なる仕事、善良なる行爲を鼓舞する目的のためでなければ、特殊の生徒に特權を與へてはならぬ。かゝる目的で特權を與へた時は、實際は特權ではない。かゝる特權は總てのものに提供されるからである。規則、命令及び其の強制に偏頗がなければ、學校に於ける正義の氣風生じ、我々生徒たるものを道德化するに甚だ有力である。

遊戯は吾人相互の關係上、正義を知らせる好機會である。勝負を争ふ時の公

平なる行動を勵行せねばならぬ。瞞著、奸計は、如何なるものでも、見附次第之を禁止し且つ罰せねばならぬ。清潔なる、健全なる、公平なる行動は凡ての社會生活に必要な徳を建設するの補助となる。

吾人は道德的及び宗教的修練の進行上、社會生活に於て例證さるべき徳としての正義は、非常に重要な徳として注意せねばならぬ。即ち家庭、學校及び共同團體生活に關して、正義を表現する説話を讀み且つ聞かねばならぬ。此種の文學は實は豊富である。又公平なる行動についての説話中に起る所の正、不正の賞罰は、吾人の心情を躍起させるものである。まして此等の賞罰は、社會的賞讃若くは非難の形式を取るから、效力更に大である。

三、正直 (Honesty) 學校生活に關聯して特殊の考慮を拂ふべき徳は正直で

ある。吾人は幼稚園時代の經歷に於て、夙に正直の必要なるを認めさせられる。私の物 (mine) と彼の物 (thine) との間の差別は、幼稚なる時には十分に分らないが、漸次に之を知るに至るものである。但し時には苦痛なる經驗に依らねばならぬことがある。學校に於て、吾人は他人の財産にて圍繞されて居り、其の多くは公共に屬し、其の或物は學友に屬する。自分のため又學校のためにも、他人の所有物に關して、正直を發達させることが重要である。吾人は學校の財産若くは學友の財産を不正直に占有してはならぬ。學友の所有品が自己の所有品よりも豊富であるとき、之を占有せんとする誘惑が起り來らぬものでもない。此の點に於て吾人は往々不平等 (injustice) の念に惱まされる、他の者が何等己れに優ることがないのに、自分よりも澤山に所有する所以を會得することの出來ぬ

こともある。之を平等にせんとの誘惑が起り來る。殊に澤山の物を所有する學友が、其の所有物を使用するに利己的若くは無慈悲で、他の學友に當然分すべきものを分與せぬ時は、之を奪掠せんなどの不届な考が起らぬとも限らない。こゝにいふ時は吾心に鞭打つて、かゝる誘惑に陥らぬやうにせねばならぬ。

正直の徳を發達させるには、所有の念を發達させねばならぬ。それには勞力に依つて事物を蒐集し、及び之を増加するのが最も宜しい。自ら働いて獲た物は價值がある。同時に他人の所有と云ふことについても會得することが出来る。他人の所有物は所有主を勞する所あるを知れば、之を盜むことの非なることが分る。働いて得ることは又他人の所有を尊敬することを教へる。勞力に依つて所有することの喜を感じたものは、他人の所有物を奪掠せようとの念は起らな

い。吾人の所有物は家庭に起る。又所有の念も幼稚の時から現れるから、両親が此の點について、常に道德化することを注意してくれるのは幸福である。

四、眞實 (Truth) 學校生活に關聯して其次に擧ぐべきは眞實の徳である。學校は其の社會的生活に於て、幾多の點で、より大なる家族であるから、此の徳について、家族に對する關係上、述べた所は、等しく學校へも適用される。談話、行爲及び靈に於ての眞實は、社會的制度として見たる所の學校の基礎石である。兒童の虚偽についての心理學に通ずると、所謂「兒童の虚言」は、實際虚言ではないことが分る。物事を秘密にせんとする本能、演劇的本能即ち一役者として演せんとする本能は、虚偽を爲すに至らせる。兒童の活潑なる想像は、幻覺に導き、誇張に陥らせる。他人を楽しませんとする本能は、兒童期の特徴

で、是亦不眞實に導く。又怒を買ふことを會得することは、事實を曲述させるものである。兒童の虚言を判斷する時、此等の考慮を費す時は、吾人の判斷は大に緩和されるであらう。若し然らざる時は、兒童をして眞に虚言者たらせる機會は學校生活に甚多い。殊に鍛鍊と關聯してかゝる誘惑が起る。學校は統治體 (a governing body) であるから、規則及び命令を有し、之に違背すると罰がある。此等の罰を恐れる所から、不從順の兒童を驅つて虚偽に陥らせる。されど吾人は虚偽よりも眞實を好むものであるから、教師は此の事實を捉へねばならぬ。眞實に對する多大の尊重は、學校生活並に一般生活に關聯して、其の價值を指摘し、吾人をして之が修養を積まねばならぬ。

此に更に注意すべき點がある。両親及び教師は、此徳に關し、各自の行爲を

特に慎まねばならぬ。兒童は實理家 (realist) である。直解者 (Literalist) である。動機なき行動と、動機より起れる行動との間に於ける、微妙なる差別をせぬものである。教師若くは兩親が、不注意に事實を云ひ表はす時、兒童には虚偽と感せられることがある。されば不精確なる及び誇張せる言表はしを注意せねばならぬ。

或場合に於て、虚言も正當なりなど云ふ議論は、兒童期に無用である。

五、禮儀 (Courtesy) 學校生活に屬する他の徳は禮儀である。教師及び學友との相互作用に於て、吾人は禮儀正しくあらねばならぬ。禮儀は、其最高形式に於て、好意の表現である。従つて特に道德的事項である。優美なる作法は修養 (refinement) の表現たるのみでなく、又道德的態度を表現して居る。此の徳

の重要な事が十分に會得されないから、學校でも十分之に重きを置かない。家族、學校、若くは共同團體に於て、吾人の社會的感情は行爲に表はれる。されば吾人は兒童の時より、行動に適當の表現を爲すことを教へられねばならぬ。各自の幸福並に他人の幸福の大部分は、かゝる表現に依屬するものである。

學校は吾人を善良なる作法に修練するの好機會を有して居る。學校は小なる共同團體であるから、長上、同輩、目下との關係が存立する。

教師は教養ある社會に行はれる禮儀作法 (the code of etiquette) に通曉し、且つ之を實行せねばならぬ。かくて生徒の模範となり、生徒をして其法式 (code) に通曉させ、且つ之を實行させることが出来る。元より其の多くは、學校で直接教授をなし、間接に實行させねばならぬ。挨拶の仕方、質問及び答辯の仕方、

恭敬を現はす仕方などは、實行せしめねばならぬ。生徒が教師の面前を通過せねばならぬ時には、之が許容を乞ふことを教へねばならぬ、換言すれば學校を支配する所の社會的禮法と云ふものが無ければならぬ、生徒が教師及び學友との社會的關係は、之を大にすれば共同團體の其れである。従つて「善良なる社會」(good society)と通例云はれる所に行はれる禮法が無ければならぬ。此の方法で其の社會的生活を表現する所の學校は、道德的に健全なる學校である。行爲は單に内的生活を反射するばかりでなく、又内的生活の上へ反應する。善良なる作法は吾人の靈を道德化するの勢力を有するものである。

六、親切 (Kindness) 禮儀に加ふるに親切を以てせねばならぬ。學校兒童は往々甚しく不親切である、これ想像の缺乏、無思慮、若くは同情の缺乏、若くは粗

暴なるためであらう。甚しきは他の者をいぢめる方法が、往々拷問に近いことがある。威嚇は不親切の一例で、蠻的に流れる。大なる兒童は己が強力を頼んで、己れの意志を小なる兒童に強制することがある。身體上の缺點、又は個人的特點を嘲弄するものがある。身分を銜うて、或兒童を社會的、集團、遊戯若くは其他の快樂より除外するものがある。これ皆學校兒童に普通に見る所の不親切である。これ學校の社會的生活を損ふもので、多くは學校に反感を懷かせ、學校を恐怖及び暗黒の場所と見做さしめ、教師の事業を阻害するものである。教師は十分注意して、相互親切の精神を涵養し、かゝる弊害を除去することを講せねばならぬ。兒童は自己中心主義であり、自己を善なりとさきめこむのであるから、こは中々難事業である。されど吾人には天性利己主義と共に利他主義の



存するものであれば、早くより之を發達させることが出来る。

七、寛大 (Generosity) 親切は往々寛大となる。又友情 (Friendship) を表はすに至る。尤も友達となるには、姻戚、社會的位置、地理的位置などが關係して居るが、學校で造られた友情は、最永續し、最樂しきものである。教師は眞の友情を造ることを鼓舞せねばならぬ。

遊戯は幾多の社會的徳を實行し、且つ幾多の社會的害惡を防止する機會を澤山に與へる。教師は之を利用することを心がけねばならぬ。教室内では兒童の想像に訴へるだけであるが、運動場では實際生活に於ての客觀教授を與へることが出来る。公明正大、親切、寛大、協同の徳及び之に相應する害惡をば、遊戯で學ばせることが出来る。遊戯監督者が使用せられても、教師は尙運動場に

居るのは賢明である。寧ろ進んで兒童と共に遊戯をなし、重要なる道德教科を教へるの手段、運動場より學ばねばならぬ重要なる徳を兒童に建設する手段とせねばならぬ。

八、宗教的感化 家庭に於けると同様に、學校に於ても道德的及び宗教的氣分 (atmosphere) と云ふものは、吾人の道德的及び靈的修練に有力なる影響を有する。近代の生物學は、個人を造りあげる上に、環境の勢力の大なることを知らしめた。文明人の兒童を野蠻人に托する時は、野蠻人として成長する。生物學者は人間の文化に於て天性 (nature) よりも寧ろ養育 (nurture) が一層有力なる要素であることを示した。換言すれば個人の發達上、遺傳よりも環境が一層有力であることを示した。偉大なる建築物は、教育上、道德的勢力を有する。

世間で善良なる學校を建設するに費す金錢は、有益に費されたもので、善良なる市民を造る上に効果がある。學校の精神について、生徒が之を誇りとする所のものあるは重要である。大なる學校は、青年に強大、威嚴及び魔力を印象する。學校の偉觀は自己—尊重及び禮儀を發揮させる。

學校の建築、設備を完全にする方が、新たな規則や罰則を設けて取締るよりも有効である。廊下を壯嚴にし、有益な繪畫を懸けて、一般の秩序を改善することが出来る。秩序は秩序を喚起する。學校當事者が生徒の快樂、幸福を増進することに意を用ふることが分れば、生徒は直に之に順應するものである。

同様に道德教科 (Moral lesson) は運動場の偉觀で教へられる。注意して保持され、巧に塗られた垣壁、歡迎して居る門、運動場の清潔、秩序正しく植付け

られた樹木、芝生、これ宛然道德教科である。紙屑が規則正しく拾はれる時、殊に、生徒自身が之を拾ふ時、善良なる市民の一要素が教授されたのである。生徒は單に清潔及び秩序に満足せず、更に社會的責任の義務について教へられねばならぬ。生徒は各自學校の一般的外觀に責任あるを知る。されば都市に對しても同様の關係があることを容易に認識するやうになる。

學校は生徒の道德的及び靈的生活を感化する所の美的理想で、青年の生活を圍繞することが必要である。外庭、室内が清潔に、奇麗 (neat) に、秩序正しくあり、壁上には地圖あり、繪畫あり、窓には花がある。場所の物的形相は學校の鍛鍊を助成し、外部の不秩序は内部の不秩序を來す。周圍の清潔は清潔なる靈と密接の關係あることは、奇麗なる手と純粹なる心情との間に於ける如きも

のである。

### 學校生活の價值

學校は一の共同團體生活であるから、共同團體生活の價值に屬する所のものは茲に認められる。又一種の家族生活とも見做されるから、其の家族生活に屬する所の價值は亦茲に認められる。殊に知力を練磨し、徳性を涵養し、體力を鍛鍊する場所として、價值を有する。されど、今日の學校生活の價值は主として媒介的である。

吾邦從來に於ける教師の位置は甚高くして、其の弟子たるもの、深く之を尊敬した。これ先づ自ら自己の人格を陶冶し、識見を練磨し、一世の師表たるを得べしと確信するに至り、始めて、其の門を開き、弟子に教へたるに依る。従つて此の種の學校生活は本質的價值を有して居た。

今や學校制度全然一變し、往昔の理想を實現する能はざるが如しと雖も、茲に考慮を費し、教師たる者、先づ自らの人格完成を努められなば、生徒亦之に感化せられ、學校生活の本質的價值を十分に發揮することが出來よう。

### 其二 共同團體 (the community) 生活

吾人は家族及び學校よりも更に大なる社會的範圍の一員である。即ち吾人は共同團體の一員である。年齒の進むに従ひ、次第に此の大なる社會に關係するやうになり、義務の範圍も擴大される。其の各員相互の關係は、主として家族

の各員、學校の學友に對する關係と同じく、此等の關係より起り來る道德的責務は、亦實際に同一である。従つて家族及び學校に對する關係上、發達せる徳及び害惡は、共同團體との關係に於ても同様である。

家族及び學校關係にて述べし社會的徳は從順、正義、眞實、正直、親切、禮儀、寛大、愛敬、忠實等である。共同團體と呼ばれる更に大なる社會に於ても、同一の徳が必要である。例へば正義は共同團體關係上、他人の權利を尊重する責務である。正直にしてもこれ無ければ共同團體は存立しない。眞實にしても同様である。社會は虚言の上には立てない。正義、正直及び眞實は社會及び個人の最高幸福を齎すものである。

親切は共同團體關係に於て特に重きをなすものである。共同團體の各員は、

學友ほど親密ではない。従つて之に對して親切にすることを深く感じないから、特に親切を盡さねばならぬ。苦痛なる者、病人、悲哀若くは不幸の人に對し、親切を施し、同情を表はさねばならぬ。

禮儀 も亦共同團體の各員に對しては、粗略になり易い。これ相互關係が親近でないからである。僕婢、貧人、老人、弱者、賓客、見知らぬ人、外國人に對して、禮儀、善良なる作法を守るやうにせねばならぬ。

粗暴に流れることの悪いことを知らねばならぬ。吾人年少の時は男女の別を問はず、禮儀作法を行ふを耻かしかるは、善良なる作法の必要なる理由を知らぬためである。社會は一種の風習を有するものである。吾人は之を知らねばならぬ。

禮儀も形式主義となり、外部主義となると、實際の精神を失ふやうになる。されば吾人は漸次に社會的、審美的見地より又道德的見地より會得せねばならぬ。禮儀作法は好意即ち尊敬、恭儉の表現として會得せねばならぬ。

吾人年少の時は家族外、學校外の人々に對する寛大は、家族内、學校内の人々に對する程強大ではない。我々兒童たるものが喜んで慈善事業をなすのは、其の犠牲が兩親若くは他人にて負擔される時である。自分で實際の犠牲を負はねばならぬ時は、寛大若くは慈善心は、さほど強くはない。されど吾人の天性利他的なる所を働かせらるれば、寛大の徳を發達することが出来る。慈善事業は、社會に多いから、我々兒童をして之を知らしめ、同情を働かせるが善い。貧民、不幸者、惑溺者に對する寛大は、不平等の此世に於て、強く涵養せられ

ねばならぬ。寛大の高尙なる例に富める文學及び歴史は實に多い。之に依つて吾人兒童たるものも、同情を働かすことが出来る。吾人は直に寛大は利己に優り、助けなき者、貧窮者を助けるばかりでなく、社會並に慈善家其人をも幸福にすることを知る。寛大の徳の美的方面をも吾人兒童たるものに知らしめねばならぬ。慈善の行動には美と云ふものがあつて吾人の注意を喚起する。又慈善家は賞讃されるものであり、吝嗇、貪婪なる自利の中には醜惡が存在して居る。凡て此等の諸徳は、集つて善良なる市民の資格を造る。即ち所謂公共心 (Public Spirit) 之である。公共心は家族、隣人ばかりでなく、全社會を包括する。即ち公共心は人をして世界の市民たらしめ、國際關係を成立たすものである。學校では地理及び歴史の研究で、此の精神が涵養される。吾人兒童たるもの、

公街道の清潔に關係して居ることを會得すれば、善良なる市民の初步を學んだものである。校庭の紙屑を拾ふ亦然りである。紙を裂いて路傍に捨てたどせよ。紙屑の落ちて居る所は見にくい。且誰れか之を拾はねばならぬ。妄りに紙屑を捨てぬと云ふ所に、社會的責任の第一原理がある。

吾人兒童をして、町を奇麗に保つ仕事に干與させることは、善良なる道德に進ませる方法である。

吾人兒童たるものも、己が住む都市に通曉して居ることが利益である。兩親及び教師は吾人に己が町のあらゆる善事を知らせねばならぬ。種々の公共的營造物について話し、且つ實地に之を見せねばならぬ。消防所、病院、圖書館、美術館、運動場、林間學校、老人收容所の如き、其れである。救貧事業、慈善

事業を實際に見ることが出来る。有名なる製造所を訪し、町の特産物を知らねばならぬ。市廳を訪問し、其の内部を見せて貰ひ、市長に逢ひ、種々の統治機關を見るがよい。

かゝる教授及び經驗は公共心を創造し且つ指導する。吾人兒童たるものは始めて都市をば選舉された人々で運轉される所の、又社會的義務を遂行し、秩序を維持し、街道を清潔にし、改良を施し、一般に其土地を幸福ならしめるために市民に依つて使用される所の便益なる制度として考ふるやうになる。かくて公共の吏員を尊敬し、吏員は責任ある位置に居ることが分る。

己が町、國家、皇室及び國民に對し、眞の理解を有することは根本的必要である。あらゆる善事は其れより來る。吾人の都市を吾人の理想に合ふやうにす

るには、善良なる市民でなければならぬ。それには先づ自分より善良なる市民とならねばならぬ。

### 共同團體生活の價值

團體内の各個人は、其の種類、其の範圍の如何を問はず、聯合の満足を感じるものである。聯合の最強大なるものは、家族生活である。友情及び相識に依り、擴大して共同團體生活となる。之が政治上の組織に依つて、市、町、村、縣、國家生活となり、更に進んでは國際關係、及び世界關係となる。此等の價值は本質的並に媒介的である。此等は高尚なる直接的満足を來し、又共同に依つて幾多の善を實現するものである。

人間の性質には、團體を形成する本能的要素がある。同情はそれである。此の社會的本能は早くより認められたが、進化論者に依つて特に世人の注意を喚起するやうになつた。進化論者は下等動物並に人間について、此の社會的本能の顯現を攻究した。社會的衝動、愛他の衝動は凡て群居する動物生活上、重要な働をなした。母親が子供の生命を保護するために、自分の生命を捨て、顧ないと云ふ如き本能的犠牲をなすの例は澤山ある。同情は其の初め夫婦及び親子の情愛といふやうな本能的形式で現はれるが、高等動物になるに従つて増大した。人間界に於ても進化の度高まるに従つて増大した。野蕃人では同情が部落内に限られ、部落外の者は敵であつて、之を攻撃し、之を殺害する。部落の大きさも發達の程度に依つて異なる。未開人の同情は野蕃人のよりも廣く、文明

人に至りては更に廣く、單に國家内、同種族内に止まらず、全世界に及ぶやうになつて來た。個人が共同團體を離れては意味なきが如く、國民も諸國民よりなる共同團體を離れては意味をなさぬやうになつた。同情が動物界に迄擴大され、あらゆる有情物を親切に取扱はうとする同情的努力あるに至つたことは、近代文明の一現象である。文明の進歩と共に社會的協同は各所に廣く奥深く發育を演じた。

#### 其四 動物に對する關係

人間は動物界と密接の關係を有する。人類が發達するに従うて、動物を飼育した。馬、牛、犬の如き、人間に有用なる務めを爲して居る。人と動物との間

に一種の「友誼」若くは伴侶が成立つて居る。動物が主人の爲に盡した美談は澤山記録にある。又主人が犬や馬に對する愛情深く、其れが死んだ時に、眞に悲しんだ説話もある。又兒童は好んで動物と伴侶たるものである。

或倫理學者は動物を有情なるばかりでなく、社會的生物として認め、人と動物との間の親密なる關係を知つて、義務の分類中に「動物に對する義務」と云ふものを擧げて居る。人間でない生物に對し、「義務」と云ふことが果して適當であらうか。義務は道德的要求に基くものである。道德的要求は人間に限られるものである。道德的要求と義務とは相關するのであるならば、そうして動物は人間でないから、動物が吾人に對して道德的要求を有すると云はれない。即ち吾人は動物に對して義務を有すとは云はれない。されど快樂苦痛を経験することの



出来る各生物に對して、親切なれ、人道的なれとは、吾人が自ら義務なりと感ずるのは明白である。従つて動物に對する義務があること云ふのと同じことである。吾人が動物との關係に於て親切なることは、吾人の道德的價値の尺度である。

He prayth well who loveth well

Both man and bird and beast,

He prayth best who loveth best

All things both great and small;

For the dear God who loveth us

He made and loveth all.

此點に於て兒童を道德化する上に幾多の障礙が横はつて居る。第一に人類發達の經路に於て、人は多少獸類及び鳥類と闘はねばならなかつた。生存競争上、かゝる多數のものに對して、敵對的態度を取らねばならなかつた。今日ですらも、有毒なる蛇及猛惡なる動物に對して、争闘をなさねばならぬ。生物學的進化に依れば、競争は實際人間の方に有利であつた。されど猛惡なる種の或物は絶滅したが、其の猛惡なる本能の或者は、尙人類に存立して居る。野獸を用もないのに殺戮して、快哉を叫ぶが如き、其の證據である。

人間は動物の肉を食する故、各時代を通じて、吾人の肉體的要求を充たすために、動物を屠殺した。かゝる屠殺は今日にも行はれ、其の數甚だ多い、これは植物質の食物で足れることを知るやうにならねば止まぬだらう。この屠殺は

必要のやうに思はれるが、多少不道德に陥るの感を免れない。

近代科學の光に依り、或動物及昆蟲は病芽の保菌者で、人間の體軀を脅かすものであることが分つた。そこで之を撲滅するの必要があり、之を撲滅するために費用を投ずる。吾人は家庭及び學校で、蠅を捕り、蚊を殺し、Cockroaches (あぶらむしの類)、鼠其の他の害蟲を撲滅することを教へる。こは爲さねばならぬことである。之を爲すのが正しく思へる。されど之が爲めに多少人道を傷ける傾がある。従つて兒童をして動物に對する義務を行はせる上に困難がある。

動物は吾々より劣れるものである。我々は吾人のために之を使役し、又慰みに供す。吾人は幾多の動物の自由を取去つて居る。牛馬を使役し、牝牛をつなぎ、犬に鎖をつけ、鳥を籠に飼ふ。動物界を支配する所の此の態度は、往々動

物を虐待する誘因となる。之が爲に動物の「權利」を保護する組織が起り、或場合には之が爲に國家にて法律を制定して居る。

兒童に動物に親切なれと云ふことを、兩親や教師が教へるのは、中々困難の事業である。遺傳的傾向や環境から來る所の不利なる感化を處理せねばならぬ。されど又之を助成する所のものもある。幼なき兒童は動物をすき好むものである。猫や犬や兎の如き家畜は、兒童の社會的生活を構成する。兒童は人間よりも之を好むものである。これ生活の此時期には、人類よりも、此等の動物の方が、兒童と共通點が多いからである。此の愛好心は成長しても止まない。犬は尙依然として兒童の友であり、猫は女兒の愛玩物である。

かくの如きにも拘らず、兒童は動物及び昆蟲との關係に於て、無考へ及び慘

酷を爲す。されば初は親切なれと云ふよりも、慘酷に取扱ふなど云ふことを重にして説くが宜い。若き兒童の慘酷は無智若くは無考への致す所である。兒童は猫や犬を無生物なるかの如くに擲りつける。又蠅が毫も風情を有せざるかの如くに、脚や翼を引抜く。稍成長すると、意識的慘酷を伴ふやうになる。蛙、鳥、栗鼠、其他の動物へ、石をなげつけて楽しい様である。又空氣銃で鳥や小動物を苦しめるものがある。後年になり、かゝる慘酷な蠻的性質を帯び、牛、馬、及び犬の如き家畜を虐待することがある。兒童を蠻的に導くやうなものは悉く之を抑制せねばならぬ。

兒童の此種の慘酷は、人類が古昔餌食となるものや敵と争闘し、之を捕獲し且つ殺戮したことの根基が、斷片的に表現されたものに過ぎないから、兒童の

かゝる行爲を判斷するに當り、酷に失してはならぬが、之を抑制するは吾人の義務である。

此の事は社會に關係する道德的義務である。共同團體の大多數は鳥の歌ふ聲や、美毛を楽しむものである。自利的慘酷を満足させるために、かゝる楽しみを取去つてはならぬ。歌ふ鳥や、美毛の鳥が突然消え去つたなら、此の世は無味のものとならう。尙其上に鳥は人類に利益を與へる。吾人の樹木を敗壞する昆蟲や、其他の蟲を食するのは鳥類である。兒童をして空氣銃などで之を撃たせたなら、後年は本物の銃で蠻的本能を満足するやうになるであらう。

## 第四章 競技的生活

運動場に於て互に競技をなす所の團體は、實に家族に次ぐ所の社會的團體である。競技的生活は蠻人、未開人、文明人の間に存し、兒童、青年、成人の間にも行はれて居る。故に之を普遍的であること云ふて宜しい。競技的生活を正當に營ましめるのは、兒童及び青年の陶冶となり、成人の能率を増進するものである。

校庭を遊戯場となせば、富者の特權を貧者も得る譯である。かくて健康を良好にして、あらゆる善良なる生活を營む助となる。されば校庭を擴張して實際の使用に適するやうにするのが最先の急務である。そうして指導者の下に種々の遊戯、運動を行はしめねばならぬ。遊技場の道德的價值は指導者の賢明なる監督如何に依つて定まる。

ゲームは單に楽しませる許りでなく。肺を擴げ背を眞直にする效がある。又筋肉を堅牢にする許りでなく品性をより善くするやうに行はねばならぬ。ゲームに依つて人生其者を會得することが必要である。遊戯は後來の勞働の先驅であり、道德生活の準備である。遊戯場は道德の教室である。吾人は此所で知らず知らず他人に對する道を感じる。勇氣、忍耐、寛容、自制を覚え、己れの順番の來るを待つこと、公明正大に行ふこと、正直に行ふことを覚え、賞品より

もゲーム其者に心を用ひることを覺える。結合したる努力即チームプレイ (Team Play) に依つて効果の多大なることを悟る。服従すること、指導者 (Leader) に追隨すること、自分を従屬させることを學ぶ。かくて生活の眞面目なる責任と云ふものを會得するの準備となる。

適當なる遊戯は身體の各部分を働かせ、且つ發達させ、各機關の機能を強大にし且つ完成する。新しき競技を始める時は、努力の調和が取れず、失笑すべきことが多いが、慣れるに従ひ、之を改善して行くものである。不器用なる、不成功なる動作、エネルギーの浪費は、熟練と共に變じて、精確、調和、優雅となるウエルリントン公 (Wellington) がウオーターローの戦勝はエングランドのクリケット競技場に基す (Waterloo was won on the cricket fields of England.) 云

云はれたる、亦理なきにあらず。運動競技は單に娯樂と見るべきものでなく、眞にスポーツマンシップ (sportsmanship) の精神を會得し、之に依つて規律、節制、克己、努力、勇氣等の諸徳を修養せねばならぬ。

一、公平 (fairness) 競技に要する最重要なる徳は公平である。公平の最簡單なるものは、競技に於て各自爲すべき仕事をなすことである。競技をして徒勞に屬せざらしめるには、恩點及び特權の公平なる分配がなければならぬ。競技には凡て一定の規則があり、之に背くものは競技者たるの資格を失ふ。此の規則を勵行するので、公平の徳が養はれるのである。

二、忠實 (loyalty) 忠實といふ徳も、公平と同様に強制的に涵養される。道徳的に統一されると云ふ理想は、チーム、ゲーム (team game) で、最能く養は

れるものである。チーム、ゲームに於ては、各員は深く共通の目的に従ふの感を刻まれ、個人を没却して部員感 (membership) の念に動かされるものである。忠實なる各員が、共通目的の爲に、奮闘勇戦する時の感は、他日國家のため、天皇のために盡す時の偉業を遂行させる基となる。

三、敏捷 知覺が鋭敏で、判斷が急速、機智に富み適宜の處理を要することは、各種競技の一般的要素である。又各種競技は手段を目的に順應させること、對手者計略の裏をかくこと、競技の新方法や新なる競技を發明させるもので、智能の活動を鼓舞するものである。模倣と想像、知的彈性亦同様に修練される。

その他、吾人青年たるものは競技に於て、競争せねばならぬこと、障害に打勝つこと、反對に出逢ふことを經驗し、困難にも逢はねばならず、失敗の苦痛

をも嘗めねばならず、己が氣分を司配せねばならず、又對手者を尊敬せねばならぬことを經驗する。競技ほど、意力及び自制を、多様に強烈に繼續して修練するものは無し。

Persistence and disappointment and pain are the costs of success.

### 競技的生活の價值

競技的生活の價值は主として、本質的にあらずして、他の生活に貢獻するためである。競技の價值は主として身體的及び知力的價值である。以前は、大人物は、青年時代に於て、一般に身體的に不活動若くは疾病勝ちなりとの思想が流行して居たが、其の謬見であることが發見された。ヨダー教授 (Professor

Yoder) は十九世紀中最も卓越せる五十人の傳記を精細に検討せるに、彼等は兒童期に於て悉く遊戯を好み、又彼等の多くは戶外若くは室内競技の首領 (Leader) たりしことを發見した。

競技の人道的價值は實に宏大である。社會的意識が最剛強なる刺戟を受け、且つ最迅速に擴大するのは、競技團體に於てある。吾人兒童の時、唯獨りで遊ばねばならぬ場合には、玩具中より遊びなかまをこしらへ、時には其の想像的仲間と會話などをやるものである。吾人が成長するに連れて、競技を複雑にすることを要求する。茲に競技の社會的及び道德的價值が認められる。

血氣旺盛なる青年時代に、チームゲームで、協同一致の習慣が涵養されると、他日社會に立ちて協同的企業を遂行する助となるや大なるものである。

青年期を經過し、發達といふことが副次的目的となるに、競技は一般に休養の性質を帯びる。眞の休養を得るには或種の思想なり、動作なり、休息なりに、心身の全力を注がねばならぬ。完全に眠れない時は、睡眠でさへ、十分休養とはならない。成人には繪畫、文學、音樂、演劇、社交などが、競技の代用をなすが、全然競技を棄てることは出来ぬ。業務の餘暇を以て、己が好む所の競技をなし。以て智徳の衰弱を防ぐことが必要である。

## 第五章 經濟的生活

個人及び社會の道德的發達上、職業的生活の至緊なることは、倫理學者の力説する所である。職業は人の生活を統一する (to unity) 傾がある。而して此の統一は其自身道德的所得である。又職業は自己並に共同團體の幸福を來す點に於て、個人と共同團體とを一致させるもので、吾人は之に依つて、世界の事業に各自の貢獻をなし、爲に怠惰より來る幾多の罪惡を免れる許りでなく、又幾多の個人的、社會的及び産業的 (industrial) 諸徳を發達させ、かくて性格の向上、發達並に社會生活の向上、發達を來すものである。

經濟的生活とは、人が生活を遂ぐることに關するものを意味する。小學校では既に職業の準備となるものを幾分課して居る。手工、簿記、習字、算術の如き之である。されど準備の最緊要なる部分は、性格を感化する所のものである。實業界で最先に要來する所は、單に方法上の知識ではなく、手や腦の働きを有效ならしめる所の人格的資格である。

一、勤勉 (industry) 此等の資格の一つは勤勉である。勤勉は怠慢の反對で凡ての事業遂行の強固なる基礎である。吾人青年たるものは時として冒險の戲曲的例及び好運にて容易に大事業を成就せるが如く見ゆる所の天才の人々に依つて盡惑されることがある。青年の時、大の怠惰者で、後年名を揚げた話はあるが、其れは例外のことである。凡ての事物は勤勉に依つて成る。怠惰より生



れ來るものは、耻辱と失敗だけである。勤勉に依つて到達せらるべき總ての事物を失ふだけである。毎日の時間は、吾人が之を價值あらしめる時にのみ、價值あるものである。凡ての青年は自己尊重と經濟的獨立の生活を營むことを希望し、一家を立て、自己の事業に成功せんことを欲する。學校で吾人が學び得る最緊要なる教科の一つは、かゝる壯快なる生活を開く鍵は勤勉なりと云ふことである。

二、名譽心 (Ambition) 吾人青年をして勤勉の緊要なることを會得させるためには、之を成就するために勤勉を要する所のものたるべく、又其れを爲すべき名譽心を持たせねばならぬ。怠惰なる生徒は往々向上心 (aspiration) を缺いて居る。彼は生活の標準低き遲緩にして無考なる生活の境涯から來たのである。

彼れの兩親、彼れの隣人が低き程度 of 食物及び住居で満足し、僅に口舌を充たすを以て足れりとして居るためであらう。學校は名譽心に訴へねばならぬ。勤勉なる青年が到達し得る所の可能を基とせねばならぬ。

同じ學友でありながら、奮勵努力したゝめに榮達せるものがある。怠惰者は機會がなかつたなどと云ふであらうが、其は泣言に過ぎない。胸に燃ゆるの名譽心は、あらゆる障礙に打勝つて、成功の途を開いてくれる。他人が投棄した機會を轉して、有效の武器とすることが出来る。

“ There spread a cloud of dust along the plain;

And underneath the cloud, or in it, raged

A furious battle, and men yelled, and swords shocked upon swords and

shields. A prince's banner  
 Wavered, then staggered backward, hemmed by force,  
 A raven hung along the battle's edge,  
 And thought, 'Had I a sword of keener steel—  
 That blue blade that the king's son bears,—but this  
 Blunt thing—!' he snapt and flung it from his hand,  
 And lowering crept away and left the field.  
 Then came the king's son, wounded, sore bestead,  
 And weaponless, and saw the broken sword,  
 Hilt-buried in the dry and trodden sand,

And ran and snatched it, and with battle-shout  
 Lifted afresh he hewed his enemy down,  
 And saved a great cause that heroic day."

成功は惠澤に依らず、武器の精銳に依らずして、確乎たる決心、勇敢なる志氣を以て、難事に當るの決意に依るものである。

三、秩序 (Order) 經濟的生活の好資格としての勤勉と名譽心と共に、秩序の徳が必要である。遅緩なる且暗愚なる勤勉は、名譽心のあらゆる夢幻を打破する。これ時間を正しく使用せざるためである。秩序は敏速 (promptness) といふことに始まる。秩序的に働く者は、常に規律正しい。これ學校で鍛鍊すべき徳である。曰く敏速、曰く規律正しきこと、曰く系統 (system) あること、之であ

る。詳細なる秩序に依つて、學校生徒が順便に進捗する許りでなく、之に依つて學生の生活も感化される。此等の徳が凡ての經濟的進歩に必要なことは、器具の知識が器械の進歩に必要なと同じである。これ無ければ繁榮は望めな

す。秩序は教室内にも必要である。机は綺麗になつて居らねばならぬ。呼ばれたならば直に之に應せねばならぬ。時間は一分と雖も無益に費されてはならぬ。靜肅は維持されねばならぬ。事務は滞りなく進行せねばならぬ。

使用者は勤勉にして名譽心あり、且つ秩序を守る青年に望を囑するもので、かゝる青年には經濟的生活の報償がある。榮進之である。責任ある位置のあいた時、登用される。これ秩序の習慣あるに依る。秩序を守ること及び系統ある行

爲で信用せられやうとせば、先づ自ら秩序的系統的であらねばならぬ。

四、耐忍 (Patience) 剛毅 (Perseverance) 勤勉、名譽心、秩序といふ資格と關聯せる二つの徳がある。耐忍と剛毅即ち不撓不屈とである。これ青年をして持久的ならしめるものである。徳の報酬は來ること往々徐々たるものである。人あり往々獨語して曰く「予は榮進せねばならぬ所の原理に従つて活動した。けれども榮進しない。予の賃銀は二年前と變はらない。無效の努力を止めよう」と。かゝる失望者は更に問ふが宜しい。「予は二年以前と比して如何程價值を高めたか。二年以前よりも事業の成功に如何程多く貢獻しつゝあるか」と。賃銀の變はらないのは自己の働きの變はらないことを意味する。されど自分は進歩したとせよ。しかも毫末も認められず、毫末も報酬が増さ無いとせよ。此の時

の必要なる資格は耐忍と剛毅（不撓不屈）とである。凡ての徳は此二つで試験される。

人は緊張し得る徳を持たねばならず、持續せねばならぬ。順境の下に働く者でも、持續的資格を持たぬものがある。成功者は幾千度も失望落膽に出遇うた者である。成功せんとした時に屢失敗した。毫も認められなかつた。領解せられなかつた、毫も榮進しなかつた。かゝる事情の下では、失望落膽し、自暴自棄に陥るものが多く、其れで結末となるが、唯成功者のみ奮闘を續ける。

されど耐忍と剛毅（不撓不屈）は失望落膽（discouragement）と困難（difficulty）とを包含して居る。此等の事情が其の存立に必要である。耐忍は普通人なら不耐忍になる時にのみ徳となる。剛毅（不撓不屈）は、其れが普通人に難義である

のでなければ意味を爲さない。軟弱なる學習は軟弱なる人間を造り、生活の困難に打勝つことが出来ぬやうになる。教科の困難なるは、生活が困難なるためである。學校は青年を修練して、困難に打勝たしめねばならぬ。

五、經濟（Economy）と慎慮（Prudence） 經濟と慎慮と云ふ徳は世界の事業に緊要である。學校の生徒は金錢を獲るの途が無いのが通例であるから、金錢を貯蓄することは、多くの生徒に出来ぬことであり、従つて金錢の價值といふものを知ることが困難である。後年自ら金錢をもうけ且つ之を保つことの困難を経験せねば眞に金錢の價值は分らない。されど浪費の悪いこと位は誰にも分かる。茲に一定の金錢ありとせよ。此を買へば彼を買ふことは出来ぬ。そこで浪費は一種の蠻行として心に印象される。先見の明なき者は、生活上の知識を缺

けるものとして恥ぢねばならぬ。

六、正直 (Honesty) と勇氣 (Courage) 經濟的徳として尙擧ぐべきものは正直と勇氣といふ人格的資格である。兩者密接に關聯して居る。正直とは他人の物を盗用せざることを意味する許りでなく、各自の心證 (convictions) に忠實なることを意味する。眞實 (true) で、眞摯 (sincere) で、無垢 (genuine) である所の人は正直である。又正しいと信ずる所のものを爲し、邪なりと信ずる所のものを避ける人は正直である。之が爲には勇氣を要する。此は自己一依頼を包含し、或程度の創造及び獨立を要する。正直と勇氣とを有する人は首領たるの資格 (Leadership) を有する。少くとも群集に従ふて害惡を爲すが如きことは無い。吾人は法律の禁止に依つてとなく、自己良心の指導に依つて其行爲を命令し、他

より命令されても、されなくとも、監視せられても、せられなくとも、正しく行はねばならぬ。

此等の人格的資格は、學校では、規則又は直接教授の外に、高尚なる模範的感化で、之を發達させねばならぬ。讀本、説話に、正直にして勇敢なる英雄的材料は甚だ多い。之に依り吾人をして、高尚なる理想、體軀の強健、吾人をして正邪の差別に忠實ならしめ、且本能的に正のチャンピオン (champion) たらしめる所の、意志及び靈の強健を誇りとする所の理想を持つて、世の中に出でしめる。

小學教育を受けたのみで、進んで中等教育を受けないものが甚だ多い。これ直に實社會に立つことを意味する。此の事實よりして、早く小學校時代に、經

濟的徳を修練されねばならぬことが非常に緊要である。此の修練をなすことが最善の職業的指導を爲すこととなる。「生存競争場裡」(the struggle for existence) に於て事業界に立ち、人類の幸福を求めんことを教へねばならぬ。此等の徳は職業生活の粗雑なる影響からして吾人青年を救ひ出すもので、職業生活の貪婪る物質主義は、健全なる理想主義で救はれる。

### 經濟的生活の價值

經濟的生活とは個人の必要が、孤立的努力では、全然満足することの出来ぬのを、交換の方法で、満足することである。經濟的價值は交換的價值で、財とは交換の力である。財は物質的であらうが非物質的であらうが、賣買し得るもの

のは、悉く之を包括する。

貧窮は精神的完成に都合よき状態であると信じて居るものが少くない。貧窮から起る所の害悪といふものが、昔は今日の如くに感せられなかつた。又富といふものがあらゆる高尚なる精神的價值の媒介として文明に貢献することの大なることも知られなかつた。

價值に本質的價值と媒介的價值との二つがある。本質的價值とは其自身善なることである。媒介的價值とは他の善を達する手段となると云ふことである。例へば知識は其自身善であるが、他の善を追求するの媒介としても亦善である。然るに經濟的價值は純然たる媒介的價值である。經濟的價值は直接の満足と與へない。唯守錢奴だけが、財を本質的善と見做すが、愚の至である。但し財を

所有すると、人格が擴大したと云ふ感が起り、満足を感じるが、これ唯他の満足を得る手段を所有するの満足に過ぎない。

然らば經濟的財は媒介として何物でも直接に得られるかと云ふに、そうではない。美味も食慾なきもの、消化力なきものには毫末の價值がない。休養も之を享樂することの出來ぬ程、病める體軀若くは惱める精神には裨益する所がない。知識は即時に買ひ取れない。之を知らんとするものが奮勵努力して學ばねばならぬ。趣味や同情も市場で買ふことは出來ない。年月を積み、時代を累ねて修養されねばならぬ。

かく財だけでは、直接に、短兵急に、あらゆる満足を得ることは出來ぬが、凡ての事が間接に財に係つて居ることも亦眞實である。殊に經濟と道德との關

係は親密である。教育も金錢を要し、美術も亦之を要す。宗教もそうである、清貧に安んずると云ふ語はあるが、極端なる又永續する貧窮は、精神上の墮落を招くものである。

貧窮が精神修養に都合好く見ゆるのは、奢侈をせぬこと、容易に高尚なる事業に就き得ることである。これとても實は貧窮其者に依るのでなく、其の人の心懸如何にあるのである。衣食住に追はれるものは、其等の物質的方面に豊かなるものに比すれば、一層多くパン問題に悩まされる。物質的方面の豊かなることは、確に高尚なる事業に入込み易い。けれども道德的識見なき時は、往々にして却つて物質主義に陥るものである。

心身健全にして産業的修練を積めるものは、必ず價值ある生活を爲すに必要

なる經濟的財を得ることが出来る。但し個人として又國家として、經濟的財を増大したにせよ。精神文化の發揚が無ければ、即ち何を愛すべきか、何を嫌ふべきかを知らねば、個人又國民の幸福は増大することは無い。經濟的財は純然たる媒介物であることを認めたらば、吾人の眞目的物たる能はざることも明白である。唯吾人の眞目的を達するに必要な手段であるから、各人をして適度に之を所有せしめねばならぬ。財の分配に關せる倫理學的理想は、各個人の眞の必要に應じて所有せしむべしと云ふことである。各個人の眞の必要は、生活の本質的善の實現に對する能量に依つて變するものである。

然らば倫理學的事業は財を道德化することである。これは生産を増大し、分配を巧にし、消費を高尙にするに外ならない。凡て生産、分配、消費の方法は、

道德的目的で支配さるべきもので、利己的獲得の衝動に委かせらるべきものはなし。



## 第六章 政治的生活

政黨は國民民福を主とすべきものであるが、往々一種の自利主義に陥るものである。これ黨人は、政治上、往々人民の幸福を考慮しないで、黨の成功を考慮し、黨の勢力を擴大して、自己の目的を達せんとして居るからである。

學校は市民を教育する所である。市民の或者は議員となるが、市民は議員選舉に於て投票をなすの權利を有する。吾人は主として自己の黨派若くは自身の利害のみを考慮する議員と、主として人民のために出來るだけの最善の奉仕 (Service) を爲べうと勉める所の議員との差別を知るように、修練されねばな

らぬ。黨人の活動は一時成功しても、自利的なる時は結局其黨を自滅させるものである。家庭奉公人で、商人から口錢 (Commissions) を取るものがある。自分で利益を收めて居る。其の主人に金錢の最善の出來得べきだけの價値を得させようとはしないのである。發見されるれば解雇され、之を利用した商人は顧客を失ふこととなる。政治上の奉公人で、人民の利害を顧みないで、或者の依頼を付けて、其の利害のみを圖るものがある。公に知れるようになれば其職を去らねばならぬ。此の不正直の自利主義は、永久の損失を蒙むるものである。

國家は倫理的營造物 (an ethical institution) である。人民の幸福と云ふことが國家の一つの目的である。人民の幸福とは人民自らが課する所の理想で、人民は此の實現が道德的責務であると會得する。其の目的、其の法律—禁止及び命

令—其の向上 (aspirations) 及び其の鼓吹 (inspirations) に依り、國家は偉大なる道徳化する勢力であり、其の最高利益を増進するに足るものは悉く爲さるべきことを證する。

學校は市民修練場であるから、善良なる市民を造らねばならぬ。此の目的を達する所の知識及び情操が養成されねばならぬ。公衆の幸福を増進する徳—國民を向上させる正善を教授し且建設されねばならぬ。此點に於て其義務を實現することを誤る學校は、最根本的なる學校責務の一つを誤るものである。然らば其等の徳とは何を指すか。如何にすれば之を有効に生徒に傳へ得るか。

一、從順 (Obedience) 政治的生活の基礎徳は學校並に家庭にて同様の位置を有する徳である。即ち從順の徳である。凡ての鍛鍊は家庭にせよ、學習にせよ、

政治にせよ、其の徳で始まる、之を缺く時は凡ての組織を危くし若くは破壊する。

從順の第一根柢は教權 (authority) である。兒童早年期及び不合理の段階を脱せざる如き社會の階級では、此の教權が從順の唯一の土臺である。彼等の知能及び意志は、其れより優つて居る明智及び力で、指導されねばならぬ。命令は注意して下されねばならぬ。これ意に適しようが、適すまいが、會得されようが、されまいが、命令であるからである。此の時期には敏速にして、無質問の從順が必要である。これ一定の習慣を造くるが爲めである。此の徳を鼓舞するものは、之を行つた時、教權を有する人々の賞讃であり、之を行はぬ時の非難である。困難なる條件の下に勇ましく從順なる男兒及び女兒の模範は、此の徳

を發達させる助けとなる。唱歌、行進及び教室内の操練、其他鐘や喇叭の合圖で行はれるものは、從順の習慣を造るものである。

年齢加はり、前よりも道理若くは想像に訴ふことが出来るようになれば、兵士及び水夫が有する所の殆ど凡ての本能的興味が、此の徳に貢献するようになる。兵士や水夫は、號令一下、直に之に従ふ。凡ての彼等の強さといふものは、此れあるがためである。かくて教師は從順の基礎としての教權を止めて、能率といふ事實に、第二の基礎を置くことが出来る。善良なる聯隊は聯隊長の命令に従ふことは明かである。學校も善き學校たるためには教師の命令に従はねばならぬことを明にすることが出来る。聯隊長の凡てのエネルギーは、聯隊を行動させるために、如何なる拘束をも受けてはならぬ。彼は怠慢者を列につ

けるために時間をとられたり、注意を散らされたりしてはならぬ。教師の凡てのエネルギーは、教授に對し、何等の拘束を受けてはならぬ。此の聯隊が生活の戰場に趣く時、不注意若くは不從順の兵士は之を弱める。競技は一般に兒童が興味を有するものであるが、之が又從順と能率との連結をなす機會を興へる。何となれば、チームプレイ (Team Play) といふ語は、動作に従順なれと云ふに等しいからである。首領 (Leader) の言に對しては、直に應答されねばならぬ。吾人の年齢更に加はるに従ひ、學校の規則、命令は注意深き明智の表現なることを會得させるが良い。此の會得は或場合には、家庭の命令が、往々衝動若くは不忍耐若くは兒童生活の何ものたるを了解することの出來ぬことの表現なりと云ふことを經驗よりし、心證せるために、妨げられることもある。されど

學校では勉めて其の規則命令の合理的なることを明かならしめるがよい。これは規則命令の理由を、時には學校全體、時には自然に出來上れる首領 (Teacher) 連中に説明する時は効果が多い。賢明なる教師は態と議論を誘起し、反對説に耳を傾けるものである。之に依て學生自身のエネルギーが教權の側に加入される。

法律尊重を教ふる上に於て、學校の効果を擧げるにはかゝることをなすのが緊要なることである。尤も學校の規則命令の表現をば、能率と道理との基礎の上にも訴へねばならぬのに、單に教權の基礎の上のみ置く所から、法律尊重といふことが起つて來ぬといふ失敗の起ることも多い。規則、命令は青年が羈束せられる所の強迫的事實である。兒童は其の制限についてのみ之を意識する。従つて之を嫌ひ、都合の悪い時には之に反對するものであるから、規則、命令

の價值といふこと及び其の正當にして必要なることを教へられねばならぬ。自治行動(例へば學校を一の國家と見做す如き)を組織すると、之から法律尊重の多くを學ぶことが出来る。

穩健なる政治的生活の根本は、法律を共通所有として尊重することである。其は我々の法律である。其目的のために選舉された人々に依つて、我々のために造られ、其俸給が税金の形で我々に依つて拂はれる所の人々が之を強制する。これ人生の生活を遂ぐる上に、秩序と能率とを保證する最善の方法として、吾人一般が一致せる規制 (regulation) である。自治制 (self-government) をどの位、中學校、小學校に採用すべきかと云ふことは研究問題である。されど其の中或處理は現に企てられて居るよりも更に多く使用せらるべきである。最單純な

る形式は一定の代表者を教師が選舉し、更に優るのは生徒が選舉し、教師が其等の人々と商議することである。其結果は今迄規則、命令は單に従はされる許りでなく、強制されるものと見做すことに慣らされて、學校を卒業した青年をして、之を吾物とせしむるに至るものである。生徒自身が規則命令の側に立つやうになることである。

二、忠君、愛國 政治的義務は忠君、愛國の情を養ふことに依つて、熱情を帯びる様になる。吾邦にては忠君即ち愛國である。此は國體觀念の所で、詳しく述べよう。吾人は早くより我皇室、我國、我國民、我首都、我住む地方を誇とすることを教へられる。かくて地理は愛國 (Patriotism) の教授となる。吾人は己等の住居する場所が、如何に宏大で、偉觀で、美麗であるかを學ぶ。吾人

は國民性の宏大なる事實を覺り、其國の根源、發育、可能性に熟通する。吾人は歴史研究に於て、開拓者、冒險者、殖民者、政治家及び英雄が何を爲したかを教へられ、貴重なる遺産を受けつゝあることを會得し、此の進歩の進行に於て、彼等の位置を占めるやうに準備して居る。天皇、中央政府及び地方廳が如何にして統治し、國會で立法する所のもの、縣會、市町村役場が一般幸福のためになす所のものを會得するやうになる。

吾人をして其の國の制度の性質及び意義に通曉させ、凡ての市民の最上の幸福を企圖し居る所以を知らせる教授は、最重要なる事項である。かゝる教授の下に、皇室、國旗は新意義を生ずる。

吾人の制度は吾人に依屬すと云ふ事實は、公立學校をして政治的位置と密接

の關係を有せしめる。學校の存立するのも、主として此の目的のためである。従つて市民より徴集した税金で維持される。凡ての社會的秩序は之に従屬して居る。學校教科の中で、道德の系統的教授ほど重要なものは無い。これ凡て吾人に關連するもので、又學校の維持を價值あらせるものは、單に文字や數字の知識を與へる許りでなく、善良なる市民たらしめる所の道德的觀念を印するからである。學校の最善の産出は品性である。

かくて正義の愛 (the love of justice) 正直の愛 (the love of honesty) 自由の愛 (the love of liberty) 平和の愛 (the love of peace) は兒童生活中に涵養されねばならぬ。倫理的、道德的、宗教的讀物は、學校の最緊要なる職責を充たすことを助けんとするものである。此は學校の全管理に通じて、補足され且つ強めら

れねばならぬ。最緊要なることは、日々の出來事を取扱ふに當り、此等諸徳の價値を發揚し、且つ學校事務行爲で、此等諸徳を解明するようになすことである。教師が憎惡又は喜怒、哀樂に依つて決定をなさず、一の意見を固執せずして、公平に参照、熟慮して決定することは、道德教授を最有效ならしめるものである。自由と放縱との差別、平和の健全なる利益、正直に取扱ふことが首要なる資格なることをば、學校の日々の經驗で、教授され得るものである。

平和の英雄、即ち消防夫、巡查等が偶發事件を處理する勇敢なる行爲は日々の新聞で解明される。勇氣は體的豪膽としてよりも、道德的豪膽として稱揚されねばならぬ。其の試験は校庭及び街上の誘惑で提供される。治者に對する尊敬 (respect of rulers) は教師に對する尊敬、公平 (fairness) 熱誠 (earnestness) 適

任 (competence) 及び同情 (sympathy) に依つて獲得せる尊敬より始まる。

吾人生徒たるもの、最高徳は社會的、進取的なることを教へられねばならぬ。各自の個人的生活を遂ぐることは、宜しきに相違なきも、各自の生活を遂ぐるには、一般の善事を進捗するものでなければならぬ。單に正しくある許りでなく、正のチャンピオン (a champion) であり、單に善良なる市民たる許りでなく、善良なる市民の防禦者、維持者であらねばならぬ。此が結局政治的生活に關連する所のあらゆる教授の標的である。これが政治的利害 (political interest) 及び政治的名譽 (political honour) の諸徳についての意義である。愛國のあらゆる情緒は其國の幸福に貢献せんとの努力、又其の國の生活を低落させるあらゆる權力及び影響に對抗して、闘はんとする努力の上に集注されねばならぬ。直

接の目的は學校に對する忠義 (loyalty) の發達である。其共同團體の中で最清潔なる、最秩序ある、最名譽ある、最有效なる、學校となすことに、各生徒の進んでなす所の努力である。對校競技の競争、ベースボールに於ける所の對峙するチーム間のゲームで表はされる自然的熱情は、生活の更に高き標準の到達に向つての更に高尚なる競争に利用することが出来る。かくすれば男兒及び女兒が成人と成つての後、其の都市を最清潔なる、最秩序ある、最名譽ある、最有效なる都市となすことの大事業に對し、同様の熱心を以て行動せしめることは、容易となるであらう。かゝる精神からして更に善良なる政治の發現を豫期することが出来る。

換言すれば團體とは國家の固有なる特性の究竟本體である。即ち國家の固有

なる特性(國性)を綜觀し、渾一觀して、其の究竟本體を捕捉して、之を國體と云ふのである。

三、國體觀念 國家生活の根柢をなすものは國體である我同胞民族の道德生活に取つても、亦思想生活に取つても、其の根柢たるものは國體觀念である。國體とは國家組織の體裁であつて、之と内容を規定するものは建國の事情と國家の歴史とである。我國體には種々の特色がある。其の主要なるものを擧ぐれば次の如し。

1、皇統一系 こは神勅の

「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也」なりと云ふ御言葉に依つて定つたものである。帝國憲法の第一條に、

「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあるは、神勅の御言葉が法文の形を取つたものである。我國では主權の源頭は天祖であつて、天祖の御意志が其の繼承者を御定めになつたのである。天祖以外に主權の源頭なく、其の御意志以外に、主權者を定めた意志はないのである。乃ち固有の大權を有し給ふ天祖が、我國の主權者を定め給うたのである。

2、君民一家 我國は大なる家であつて、其の家長は畏くも君主の御方に在はすのである。君主の御方と人民とが、國といふ同じ家に生存して居るので、即ち君民一家である。我國にては國が即ち家であるから、我國の主權は家長權が自然に發展したのであつて、人爲彫琢の跡がないのである。されば我國にあつて、君主と人民との關係は、一方から見れば君臣であるが、他



方から見れば父子である。君臣即父子である。こゝに忠孝一致を始め、多くの國民道德が生じ、こゝに君臣一心、上下一體の國民的美風が成立つて来る。忠に一致する孝、孝に一致する忠は、世界各國中、我國にのみ存する所である。忠孝といふことは君父を崇敬して一身を捧げて柔順に是に事へ奉ることの意味である。そうして之が祖先崇拜の大義と一致して居るのである。忠孝は現在に於ける祖先崇拜で、祖先崇拜は過去に對する忠孝である。現に在す親若くは君に對してのみ、忠孝と云ふ觀念があるに止らずして、親の親、君の祖先、凡て遠き過去に溯つて、之を推及ぼすと云ふことが我國忠孝固有の觀念である。忠と孝とは其本を一にすと云ふは此の義である。我建國の本領は家といふ制度にある。家と云ふ制度を推擴げて、國を成して居るのである。

故に家に於ける家長、國に於ける皇位と云ふものは、唯物に大小あり、事に輕重あるのみであつて、同じく皆其の本は、祖先の威靈を代表することに歸著して居るのである。我國に在つては、家に於て現在の親に孝行なりと云ふことは、家に於ける祖先に對しての孝行となり、又現在の皇位に對して忠なりと云ふことは祖宗の威靈に對して忠なる所以である。吾民族の始祖は我家々の祖先の祖先であるから、系統を引いて之を源に溯つて見れば、同じ一點に歸著する。其故に忠と云ひ孝と云ふも同じことにある。

3、**君國一體** 我國では君主と國家とが一體不二であつて、到底之を分けることが出来ない。君主と國家とは全然一致して居て、皇運が盛んであれば、國運も亦随つて盛んであり、國運が盛んであれば皇運も亦盛んである。忠君

は即ち愛國であり、愛國は即ち忠君である。されば皇運の扶翼は愛國の行爲であつて、忠君と愛國と一致し、忠臣と愛國家と一致し來るのである。忠君に一致する愛國、愛國に一致する忠君は、世界各國中、獨り我國にのみ存する所である。これ我國は皇室を中心として建設された國なるが故である。

四、國際關係 社會の發生漸く進みて國家の發生を見、各國家の對立を見るに至り、國家の孤立的生活を許さずして、國家の集團的生活をなさざる可らざるに至れば、茲に國際の交渉を生ず。國家的發動の外部に對する關係を國際關係といひ、國家の集團的生活を國際生活といふのである。國際生活に交和と競争とがある。國際交和は、勢力の權衡より來るものがあり、經濟上の關係より來るものがある。國際競争に於ては、劣者は敗亡し、優者は勝存する。されど

國際競争は全體に於て弊害なりと見るこそ漸く著く、國際競争を悲觀するの極、國際生活其者を悲觀し、各國家の競争的對立を絶滅せむとする計畫を生じた。

宇内に於ける各國家の競争的對立を絶滅させるに、二様の方法がある。一を帝國主義といひ、他を平和主義といふ。

1、帝國主義 各國家の中、特別に或一つの國家が拔群なる發達を遂げ、他の諸國を滅し、自國で世界を統一すること、これ帝國主義の期する所である。されば帝國主義を實現するには、其の道程に於て、最も激烈なる國際競争をなすの止むを得ざること、言を俟たない。帝國主義は國際競争の結果として、優者が凡ての劣者を克服する時に實現される。此際、劣者が早く自ら劣者たるの運命を達觀して、何等の抵抗を試みざる時のみ、帝國主義は競

争を伴はずして實現されやうが、かゝることは全然期待することの出来ぬものである。されば國際競争を絶たんとして、却つて國際競争を煽るものである。

2、平和主義 各國家は相互に調和を保ちつゝ、均等の發展を遂げ、合意を以て各國家の組織協同を大成し、以て世界を一丸とせる、秩序ある大社會の成立を期するものは、平和主義である。されど各國家の相互に調和を保つことは至難のことであり、且つ各國家が均等の發展を遂げることも、望むべくして實現せらるべきものではない。均等の發展が無ければ、各國家の關係は、直に優劣の分を生じ、従つて勝敗の機を藏し、平和は破壊せられるやうになる。

是に於て、世界は幾多の國家が相對立對存相對峙せるまゝで、平和を出來得るだけ久しく、出來得るだけ完全に維持せねばならぬこととなる。昔は軍事上弱い國は必ず滅されたものであつたが、今日の國際生活に於てはさうは行かない。弱小國が存在の權利を主張するを得、現に有力に主張してゐるのである。其所に如何なる集團も個體としての生存の權利を有つと云ふ平等觀が具體化されることになつた。各國家は其の國家内の生活に於ける個人と同じやうに、各自均等の機會を持つ權利があると考へられ、觀念上、公正の法則を破らずに生活し得ると云ふ状態になつた。尤も事實の上では觀念上の公正を立派に具體化しては居らない。

3、國際法 國際關係を圓滑ならしむる手段として、自然に起り來れるも

のは國際法である。國際法が國際統制の一機關として、國際の秩序を持來す上に、多少の效力があることは、云ふ迄もないが、法に固有なる所の制裁力を伴はないから、法律よりも察る道德若くは慣習を以て擬せられる方が穩當である。

國際間に於て國と國との關係即ち一國の他國に對して爲す所は、何を動機として定められるかと云へば、感情、利害若くは正義である。國家の爲す所が、盡く正義の觀念に基礎を置き、國民は常に正義の何ものであるかを明にし、國民自身の方で、國家の所爲をして正義の常道から逸出せしめないようにしたならば、是れ位喜ばしい事はないのであつて、國際間の關係に局面一新を見るであらう。

然るに國家の爲す所が感情に流れ、利害に趨つて居る場合は甚だ多いようである。而して國際間に於て國家の行動する場合には、個人の行動を律する場合に於けるように、法律の制裁、社會の制裁がないと云うても宜しい、國際法規を蹂躪したとしても、法律上の制裁は加へられない。

仲裁々判制、進んでは國際聯盟の規約は或程度まで此種の缺陷を充し得るものゝやうにも考へられるが、甚しく微力である。従つて國際聯盟が成立した今後に於ても、國と國との關係が常に正義の觀念に支配されるとは考へられないのである。

4、國際聯盟 平和運動の希望を實現せんが爲に提唱された國際聯盟は左の如き大綱を包含して居る。

- 一、聯盟各國は主權を最高位より次位に降すことを肯認し、所謂國際聯盟の權力をば各國主權の上に置くこと。
- 二、國際聯盟は聯盟列國に加ふるに懲罰を以てするの權力を有すること。
- 三、前項の懲罰は經濟的懲罰及軍事的懲罰より成立すること。
- 四、前項の軍事的懲罰を有效ならしむるが爲に、左の二事を實施すること。
  - イ、聯盟列國の軍事的實力を最小限に制限縮少すること。
  - ロ、國際聯盟は直屬の軍事的實力機關を有し、若くは聯盟列國より或方法を以て召集せる軍事的實力機關を臨時構成すること。
- 五、國際聯盟の權力機關は、聯盟列國を上下二段若くは上中下三段に分ち、其の構成比重に差等を附し、其上位の者の中、更に實質的に重要な

差等を附し（英米二國と佛伊日三國）一國若くは二國を優位國とし、極めて不均等なる組織を以て之を構成すること。

- 六、聯盟各國に臨むには、其内治事項に至るまでも極端なる劃一主義を以てすること。例せば一國が徴兵制度廢止を便とすれば、列國皆徴兵制度を撤廢せざる可らずとなし、一國家が或工業を廢止するを便とすれば、列國舉りて斯くせざる可らずとするの類で、之が理論的口實としては「世界の趨勢に順應す」との標語が濫發せられる。

大要、斯の如き國際聯盟で、世界の平和を維持し、秩序を保ち、進歩を致さうとするも、所期の目的は達せられぬであらう。

- 五、國際正義と人類共存 國際道德と個人道德との間には、今日尙矛盾が

存する。個人道徳に於て不法であることも、一度び國家の名を冠して行へば、適法となるものがある。けれども各國家は國際的正義の確立を理想とし、其追求が善であることを意識しつゝ進んで居ると云ふて宜しい。宇宙の神秘なる法則は、其の理想を無視し、人類文化の大勢に逆行せんとする國家の存立及び發達を不可能ならしむるもので、孰れの國家も永久に國際的正義の反逆者として立つて居ることは出來ない。孰れの國家も其の存立と發達とが、國際社會の全體に取つて有益であり且つ必要であるやうに自國の經濟的及び文化的生活を改良して行かなくては生存することを許されないやうになつて居る。若し強ひて國際生活の邪魔になり、他の國々の害毒になるやうに生活せんとする國があれば、自然淘汰せられる運命を免れ能はぬ。故に今後の國家

は、正義を國內に確立すると同時に、又正義を國際間に確立することを理想としなくてはならぬのであつて、之に魁し得る國家は、聽て人類文化の先導者である。國際聯盟など云ふ思想が是迄皆空想に終つて居るとは云ふものゝ、其の背後には過去數千年に亘りて、最も優れたる階級に屬する人々の血涙を以て、擁護せられた國際正義の觀念が、働いて居ることを否認することが出來ない。而して此の國際正義の觀念と、人類共存の倫理とを守り立てることは、現代人の世界文化に對する最高且つ最大の義務である。

### 國家的生活の價值

我邦固有の制度に於て、國とは主權を以て之を統治する民族團體である。主

權なければ國は無い。而して主權の存立する所以は各國其の原因を異にし、歴史を異にして居る。我民族は萬世一系の皇位を以て、民族を統治する主權の在る所として之を崇敬し、之に服従し、之を中心として其の周圍に發展し來つたものである。帝國憲法第一條に

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

とあるのも、此の事實を明にしたものに過ぎない。萬世一系の皇位は即ち祖宗の御位である、祖宗の御子孫が相承けて萬世此位に居たまふのである。是れ天祖に代つて天位に居り、而して國家統治の天職を行はせらるゝものである。家に於ける親族團體の意を推擲して之を大きくしたるものが民族團體であり、家に於ける家長權の意を永遠廣大にしたものが國家の主權である。

國家の主權が國家的生活の中心となつて居る國は、世界廣しと雖も我國ばかりである。これ程強固なる國家は無い。外國では國家的生活の中心を國旗に求めて居る國もある。

國家的生活は吾人の究竟的生活である、猶太人の如き、猶太民族の國家といふものなく、他の國家の下に生活して居るが、各個人について云へば矢張、國家的生活を營んで居るのである。歐洲には小國が散在して、各國各自に種々の制度を定め、共通の利益を損する所から此等の國家を纏めて、世界國家 (World State) を建設せんとの思想を懷いて居るものもあるが、畢竟國家的生活を究極のものとして居るのである。國際的生活が國家的生活よりも上にあるやうに思ふのは誤りで、個人を離れて社會なきが如く、國家を離れて國際關係なきは言

を俟たず。國家的生活を究竟なりとするも、自國のみを見て、他國を顧すと云ふにあらず、國家的生活の崇敬せらるゝは、國際的生活に於て、共存共榮の理想を表現するためである。従つて國家的生活の價値は本質的なりと云ふて宜しい。

## 第七章 美的生活

吾人の美的性質を道德化し且つ靈化するものでなければ、教育は完成したとは云へない。吾人は天性美的のものである。實に社會的であり、且つ美的である。早くより美を樂しむものである。道德と宗教とは、美的發展と特殊の關係がある。これ美と善との間には、親密なる關係が存立するからである。プラトウやシャフツペリイやシルレルの如き思想家が、美と善とを一致させたのもこれがためである。之が果して正しいか然らざるかは措いて問はず。美的生活が道德的生活上特に重要な要素たることは疑を容れない。



希臘人は教育上、美的教育を重要視した。これ其の道德的效果が個人の上に及び、個人を通じて國家の上に及ぶからである。害悪は實に醜事である。美に感ずる所の精緻なる靈は、之を見て怒り、之を侮る。自然の美、人工の美の吾人の生活を高尚優美ならしめることは甚多い。音樂が秩序及び調和の念を振起し、詩歌が偉大なる事業に憧憬せしむるが如き、其の一端である。一種族の道德的進歩を説くには、特に重要な要素として、美的進歩を擧げねばならぬ。

宗教も亦吾人の美的性質の發達と密接なる關係を有する。美的意識と宗教的意識との間の關係は、至つて親密である。凡ての美術は宗教に利用される。實に宗教は表現の手段として、非常に美術に従屬する。詩歌、音樂、繪畫、建築及び彫刻は、宗教の活動的從僕である。宗教的意識が其自身表現せんと努力し

ても、美術なければ殆ど絶望である。美術は宗教に對し、表現の手段を供する許りでなく、又往々にして宗教的思想及び感情を鼓吹する。宗教的音樂が鼓吹的勢力を有することは、世人の一般に經驗する所である。更に又日没の美、星夜の宏壯、山上の莊嚴、暴風に搖られる大洋の偉觀は往々神(Dionysus)といふ思想、吾人と神との關係についての思想を醒起する。これ等は宗教的尊敬及び敬愛を喚起する。天の宏壯が宗教的性質を喚起したことは歴史上の例に富んで居る。

美的生活の諸徳に對し、吾人を修練する方法如何と云ふに、形式的方法に入るの前、吾人の家庭及び學校の環境で、美的修養に關係するものの有力なる感化に關聯する二三の明白なる事實に注意せしめるが宜しい。吾人が家庭及び學校建築物、及び庭園に表はされる如き美の効果で、精練され道德化されるこ

とは、疑ふ餘地が無い。少くとも十歳の頃には既にかゝる感化に感應する。然るに建築物や庭園が醜の模範となることがある。醜の効果は道德を頹廢するものである。此の點で改善されつゝあるとは云ふものの、理想を去ること甚遠い。家庭及び學校建築物は、善良なる建築の模範であらねばならぬ。經費の點より云へば美醜に依つて大差はない質素 (simplicity) は美の根本標的である。質素は經濟である。校地についても同様である。

家庭及び學校の内部も亦相當の考慮を拂はねばならぬ。裝飾は質素にして趣味あるものでなければならぬ。其の多くは兩親及び教師の力で自由になるから、絶えず之に向つて努力せねばならぬ。繪畫及び花卉は利用されねばならぬ。兩親若くは教師で、繪畫の鑑識なきものは、鑑識家の助力を請ふが宜しい。あ

らゆる手段で、家庭及び教室をして、吾人の美的性質を涵養せしめるようにするが宜しい。費用は少くして價值は多い。

教科目の點より見れば、吾人の道德教育に於て、少くとも二三の美術を教授して、吾人の美的性質を發達させることに努力せねばならぬ。音樂、詩歌、色彩細工及び圖書は早くより教科として課するが宜しい。之についての研究に依れば、小學校で、かゝる仕事を爲して宜しいとのことである。音樂及び詩歌について云へば、リズムに對する感情は本能的であり、之が此等美術の知識及び敬愛を吾人に發達させるために、教育的努力をなす自然的基礎をなすものである。

一、詩歌 (Poetry) 教師は生徒をして詩歌に興味を有せしめようとする上に

多少の困難を見出す。多くの児童は歌ふことを愛するけれども、三、四、五年生ですら往々詩歌を嫌ふものである。これ大體詩歌の内容に精通せんがため、提供する所の韻文中に、簡單なるリズム (rhythm) の必要を看過するに因由せざるか。教科書中にある一層簡單なる抒情詩 (lyrical poetry) は生徒に歡迎されるものである。行動を述べたる詩歌は、單なる記述的詩歌よりも、一層吾人に興味を感じさせる。其の上、詩歌中の行動が客觀的に表はされてあれば、吾人の興味は激しく起される。

二、色彩細工 (Colour work) 小學校の教科中に入れらるべき美的鍛鍊即ち學科は色彩細工である。兒童心理上の研究に依れば吾人は初年級よりしてかゝる仕事に従事するに足るといふことである。幼稚園時代に、吾人は色彩の對比、

色彩の價値を會得することを習うた。従つて小學校に入れば、學校で教へられる色彩細工に従事することが出来る。かゝる仕事は美的快感を喚起し、以て自然及び美術の美を更に多く、精細に會得するの端緒となる。此會得は又道德的性質をも醇化する。

三、圖書 (Drawing) 圖書はロック (Locke) の主張せる如く、有用なる理由に依るばかりでなく、更に又美的及び道德的理由に依つて教授されねばならぬ。形體についての會得は早くより發達し、小學校の初年級で、輪廓 (outline) 均齊 (symmetry) 割合 (proportion) についての幾分の會得が發達して居る。中學校初年級の頃には圖書を美的修養の手段として従事することが出来るやうになる。

四、模型製作 (modelling) 模型製作に關しても同じ事が云はれる。之に依つ

て美的感應 (aesthetic reactions) を得ること容易である。實物に對しての直接なる美的感應と、再現即ち實物の心像を了解することを包含する所の美的會得との間の差異を、十分に會得させることが出来る。再現 (representation) の美的會得は、後年に發達するものである。これ吾人叡智の發達進捗せる後に起るからである。されど美術が包含する如き、再現の會得ですらも、實物の直接表現に比して、甚早くより吾人に依つて了解される。トラツキイ (Tracy) 及スチムブル (Stimpp) は吾人が三歳若くは四歳にして、再現の觀念が發動し始めることを云ふて居る。されば小學校の初年級で、美的修養の手段として、かゝる仕事を爲さしめるのは、適當の處置である。されど吾人の力は規則として十歳迄は、二ダイメンション (dimension) に於ける空間 (space) の表現に限定せられること

を忘れてはならぬ。第三ダイメンションの表現は、其れより後に發達するものである。早年より此方向に於ける修養は、後年美術についての精練せる會得の準備たることを看過してはならぬ。而して此の會得は單に美的快感の根源たるのみならず、又道德的及び靈的發達の手段として用立つものである。これ美と善との間には親密なる關係があるからである。

凡てかく音樂、詩歌、色彩細工、圖書及び模型製作についての修練は、吾人をして美の愛を起させることを教養する傾を有するもので、これが亦吾人の道德的及び靈的發展を促すものである。上級に於ては興味ある具體的、且圖說的 (pictorial) 方法で、世界の大地畫、建築物、彫像等を示し、美術を賞鑑させて、以て以上の修練を補助するが宜い。實に其の中の二三の繪畫は、教室、講堂の

壁を飾らせるがよい。美術的の生活についての説話は亦其の製作品に興味を起させる助となり、かゝる傳記的略説は亦道德的價值を有する。これ此等美術家の多くは、其美術に専心努力した所の犠牲に於て、英雄であつたからである。

五、繪畫 (picture) 教師は更に美術上の美に對する吾人の敬愛を發達させるために、教室内で一層直接の仕事に課して、之を助成する他の方法がある。各學校は大幻燈器 (stereopticon) 及びスライド (slides) を備附けて、吾人の美的性質に訴へ、且之を教育する目的のために使用するが宜い。兒童並に成人も繪畫を楽しむものである。活動畫に興味を表はすのは其の證據である。此繪畫好きの本能を巧に利用すれば、吾人の美術に對する方面が更に大なる發展を爲すであらう。吾人は教師の熟練なる指導の下に、漸次に美術上の古典的美を會得す

るやうに教へられる。幻燈器械 (lantern slides) 畫布 (canvas) 活動畫の器械が近き將來の教育上、重要な位置を占むべきは疑を容れない。而して此等は美的教化及び道德的教化の目的に向つて使用されねばならぬ。

六、美術館 (Art galleries) 時々美術館を訪問することも、美術上の美についての吾人の敬愛を教化するに利用さるべき一方法である。多くの大都市にはかゝる美術館がある。其中に蒐集された繪畫及び彫像を吾人に見せぬようでは、其の美的性質を發達させる好機會を逸するものと云ふべきである。更に又多くの都市は美しき公共の建物、寺院、個人の住宅を有し、單に都市の誇りとしてのみならず、美的教化事項として、其等の美に注意を惹かせるのは良いことである。都市の兒童は殆ど毎日かゝる建築物を見て居るから、環境の美的影響に

感ずる所の美的性質が發動する。両親及び教師が此點で精練し、發達して居れば、かゝる建物の美的生活に及ぼす價値を會得すること愈大に、且つ吾人の知的、道德的及び宗教的生活上、教育的勢力として之を使用することは、道德的責務なることを感ずること愈大であらう。

七、自然美 (Nature) されど美は美術に限られては居らぬ。自然は美を以て裝うて居る。自然についての知識並に美の敬愛を發達させる所の教育的目的を以て、吾人をして此の美に親しましめねばならぬ。兒童期の早年に於て吾人の知的興味は主として感覺及び想像の其等であり、思想生活は未だ發達しない。されど感覺は印象せられ易く、活動的で又實に熱心である。吾人兒童たるものは主として客觀界に生活する。自然といふ世界が強く吾人に訴へる。自然界に

は探索すべき物が多い。吾人は自然物が喚起する所の感覺を楽しむ。感覺的好奇心は活潑で、合理的好奇心の起る土臺をなす。事物についての深い知識は其の次に來る。此時期には感覺が勢力を逞しうするから、其の教育は感覺界に關聯せねばならぬ。従つて自然研究が吾人兒童たるものの注意の大部分を占めねばならぬ。かゝる研究は知的利益あるに加ふるに、美的性質に關する利益がある。

自然の美に對する吾人の最初の美的反應は甚だ早くより起る。元より最初は單獨の物體に限られるが、漸次に全體を構成するとして取扱はれる數多の物體に及ぶ。吾人の花に對する美的快感は早く四歳の頃に表はれる。通例吾人が第一に會得するものは、個別的事物の運動の美、若くは立派 (Grace) といふこと

である。かく美についての早き會得に表はれる所の、單獨の物體を、動く所の物體として取扱ふ傾向は、山水の美を會得する能はざる所以である。吾人兒童たるものは變化 (variety) の中に統一を擱むことは出來ない。多を一としては見ない。此の力は後年に發達する。此は亦繪畫及び美しき建物の美的會得に關しても同様である。故に吾人早年の此の無能を以て、生涯然るものと極めてはならぬ。更に成熟せる發達を待たねばならぬ。

多くの都市に美しい公園がある。之を利用して吾人の自然美に對する敬愛を教化するが宜しい。若き兒童の中には、興味が自然の大景よりも、寧ろ美しい個々の物體、若くは山水の小切片に特に集注される。故に吾人兒童たるものの美的性質を取扱ふには、其れに依つて働かせねばならぬ。されど後には更に大

なる光景、郊原、河川、森林、大海、山岳、山水、星天に對する興味が、其注意を喚起し、以て美的快感を感じさせる。美と善との間に存立する微妙なる關係からして、自然は其の美に依つて、吾人の道德性を支配する。賢明なる両親及び教師は此事實を利用して吾人の生活を道德化せんと努力する。此目的のためには屢吾人をして自然を訪問させるが宜しい、郊原、牧場、海岸、山岳の如き美の住居を訪問すること(かゝる訪問の實行し得る時)又は都市の花園及び公園を訪問することは、自然と接觸させ、其の微妙なる感化により、精練し且つ道德化する效果を得しめる。

吾人は早くより美的性質を表はすものである。元より早年には美しき物體の形式に於ける外界刺激に對する心的反應の多くは、重に感覺に屬することは疑

ひない。されど漸次に美的感情の高尙なる形式に於ける美しき物體に反應するやうになる。かゝる反應はトラツキイ教授 (Professor Tracy) 及びドクトル、スチムブル (Dr. Stimple) のなす如く、十歳の時より始めねばならぬが、其れにしても兩親が美的感情を發達させるに十分の時があると云つて宜しい。其後の兒童期及び青年期の間、兒童及び青年は美しい山水、壯麗なる繪畫若くは熟練せる建築術より成れる偉大なる建物を見ることに依つて、美的感情を十分働せることが出来る。早期よりの美的修練は後年の教化に對する準備ともなり、又美的及び道徳的及び靈的立脚地から見て、確に價值あるものである。

八、家庭園及學校園 (Home and School garden) 常に獎勵されねばならぬ所の美的教育の他の手段は家庭園及び學校園である。かゝる庭園を耕すことから

生ずる所の衛生的及び實益的利益が其の價值に加はる。されど之より導かれる美的及び道徳的利益は大であり、且つ其耕作をして價值あらしめる。かゝる庭園は地方では家庭と連絡して、容易に設立することが出来る。地方の學校、村落及び小都市の學校も亦庭園を設立せねばならぬ。之に費される努力と費用とが、道徳的效果を生ずれば、正しく使用されたと云ひ得る。兩親は此種の美的教化について學校と協同せねばならぬ。

九、行爲及び品性 (Conduct & Character) 美は單に美術及び自然にのみ限られない。行爲及び品性にも亦表はされる。吾人が行爲及び品性を記述するに使用する言語の多くは、實に美的資質及び關係の記載たる語から成立つて居る。公平なる事業 (Fair deeds)、美しき行動とか、汚れたる事業、嫌ふべき行動など



云ひ、適した行爲、適せぬ行爲といふ。小供の動作を清潔 (clean) 若くは不清潔 (unclean) として標榜する。かゝる語は美的語である。されど之を道德的資質並に關係に迄之を適用する。これ美と善とが如何に密接に關係して居るかを表はす。否單に密接に關係して居る許りでなく、善は往々美にして、惡は往々醜である。實際「神聖の美」があり、害惡の積極的醜がある。かゝる善と惡との美的形相は、吾人をして此を選び彼を拒ましめるに、有力なる動機たるを立證する。従つて吾人が善に反應する時、往々倫理的としてよりも、美的とする方更に大なることあるは眞實である。かゝる善の美的形相は、吾人を驅つて正道に就かしめるものである。親切なる行動の美、聖人の品性の敬愛すべきこと……此等は吾人を感奮 (inspire) せしめる。孔夫子、ソクラテス、耶蘇の品性及

び生活の宏壯美 (sublime beauty) は強く我々を感せさせる。「多くの人々が美の門を通りて神國に至る」 (Many enter into the kingdom of God through the Gate Beautiful.) とは眞實である。美的嫌惡 (disgust) は實際に道德的嫌惡を發達させる助となる。個人の道德的及び宗教的性質を發達せしめんとするには、行爲の美。及び品性の美についての認識をさせねばならぬ。

吾人の道德的及び靈的發展に於て、何歳より善の美に反應し、惡の醜に反抗するかは、實驗的研究不十分なる故、未だ明言することが出来ない。されど中學校の初年級に於ては、確に善なる行爲、善なる品性の美的感化に反應する。されば兩親及び教師は此事實を利用するが宜しい。吾人が主として早年に於て興味を有する所の美は、運動の美であり、又繪畫にて企てる所の最多くが、人

間に關する畫題なることは、面白き事である、かく吾人は早く動作に興味を有し、又人格上に大興味を有する點よりして、吾人は美的性質に依つて道德的行爲及び品性のために、早くより働くことが出来ること云ひ得る。人間生活に美があるが、其の最高表現は個人の善行爲及び善品性の中に見出さるべきものである。吾人は惡人を嫌惡する。實に吾人は地球上最ましき物は善人なりとする。

### 美的生活の價值

美は、自然界にも、美術界にも、無數の形式で現はれて居る。美と云ふものは最純然たる本質的價值を有するものである。自然界の美を樂しむこと、若くは美術の創造を樂しむことは、生存競争を超越させ、吾人の心配や、齷齪といふことは忘れられ、心も晴朗に澄み渡り、自己没却の狀となる。生存競争場裡は意思の絶えざる努力である。美的經驗は物事に捉はれない靜平である。美に接すれば、人類生活に伴ふ災害悲哀を忘れる、美術は恰も遊戲の如く、單調にして下品なる生活界を一時脱離させる最良手段である。ゲーテが毎日僅かの音樂を聞き、善き詩を讀み、美しき繪畫を眺めよと勧めたのはかゝる見地よりである。

Man sollte alle Tage wenigstens ein kleines Lied hören, ein gutes Gedicht lesen ein treffliches Gemälde sehen, und, wenn es möglich zu machen wäre, einige vernünftige Worte sprechen.

美感といふものは本質的價值ばかりでなく、媒介的價值をも持つて居る。即

ち吾人のあらゆる活動を色彩づける。生産品の流行、身體生活の様式、社會的關係の向上、知的活動の能率は、之がために左右せられる許りでなく、宗教も之に依つて潤飾され、品性其者も亦改善される。ラスキングが趣味を教ふる時は必然に品性をも造り變へる (to teach taste is inevitably to form character.) と云へることは、經驗の證する所である美感は實に害惡の誘惑を止むる關門である。

美的衝動はかくの如く媒介的價值があるが、其の道德化といふことも、其自身大切なる問題である。特に美術界に於ける創造的活動について然りとす。「美術のための美術」といふ格言は、之を以て究竟なるものとなすことは出来ない。こは「仕事のための仕事」「健康のための健康」「知識のための知識」など云ふ格言と同じ困難に遭遇する。仕事は仕事の原理の下に爲されねばならぬ。身體の

健全は生理學的理法に依つて指導されねばならぬ。知識は嚴重に論理的に追求されねばならぬことは、誰しも疑はぬ所である。美術も亦其の通りである。美術のために働く時には、美術家は其の美術の完成といふ以外には何物にも眼を向けない。利益とか、

喝采とか云ふことを考慮することは、必然其の創造力を傷つけるものである。従つて「美術のための美術」といふのであるが、美術の占める位置といふものは、道德的生活の支配の下に決定されねばならぬ。

美術其の者は價值系統上に於ける所の美術の位置を決定する原理を備へて居らぬ。美術は其の製作品の美術的意義を批判するのみで、更に廣く關係に於ける美術の意義を批判しない。されば美術は吾人の能力を刺戟すれど、規整はせ

ぬ。鼓舞すれど統御はせぬ。吾人が澤山の美術品を見る時、順次各美術品に心を占有され、自己満足を感じるであらう。けれども此等の印象は相互間の規整(organization)及び調和の原理を與へない。況や他の價值との適當なる關係を定めるやうのことはない。これは道德的理由にのみ望むべきことである。眞理と價值との標準に照らして幾多の經驗印象を批判し、排列する役目は道德的理由である。人が空想的愛を題材とせる演劇や小説に見とれて居る間は、愛が興味、單獨目的であり、又實に生活の全體であるやうに思はれる。されど其の見解たるや狹隘たるを免れない。生活を規整するものは道德である。吾人は其の理法から逃れることは出来ぬ。此の事實を認めないものは、結局生活を打破するに至る。又道德にして理由正しき各價值に正當なる位置を與へぬならば、願

みられぬやうになる。美感は道德から離れることは出来ぬ。然らざれば美は無理無法に陥るの危険がある。

高尚なる形式に於ける美術は、道德向上の大鼓舞者である。これ美術は超越的要素を持つて居るからである。美術的衝動は、現に吾人の經驗に觸れて居るものよりも、一層完全なる或物を創造せねば満足しない。これ迄に見たことも聞いたこともない物を請求して止まない。此點が道德的衝動と一致す。道德的衝動も事物を見た儘にして置くことに満足せずして、之を改造して一層完全なる秩序にせんと求める。道德的衝動も美術的衝動も、共に一樣に理想的完成觀に支配されて居る。美術が美の形式で暗示される所のより善き自然を追求させることは、道德に劣らない。